

古乃花双紙

梅川  
忠兵衛



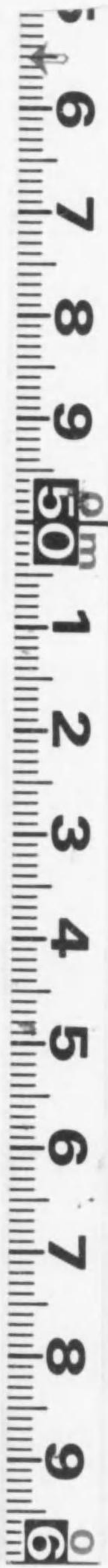
特 259

400

53

3

9



始



特 259  
400

小枝繁著

盈齋北代山畫

古乃花双紙

(梅川 忠兵衛)



東京藤谷宗文館  
大阪

本書は近松の名作「冥途の飛脚」を、書肆咬菜堂主の囑によつて、後には怪談物で特に名を知られるやうになつた著者が雛案を試みたものである。時代は長祿年間、舞臺は京の三條、鳥原、主人公は梅川忠兵衛、奇縁と情話とに、孝子の復讐や貞女の節操を絡ませている。

小枝繁は號を峰山と云ひ、又別に顯麟陳人（或は間士）とも稱した。此書は其初期即ち文化六年の作である。

畫工北岱は葛飾北齋の門弟で、善く其師の筆意を模し得てゐる。

坪内逍遙識

自序

書肆咬菜堂主人謂予曰。近松子之所著院本。有題「冥土飛脚」者。閱其爲書、紀下妓女梅川者。爲脚夫忠兵衛守節經苦艱。終共亡之事。矣。雖戲曲也。貞操行有足憐者、焉。是以市井之愚夫愚婦、膾炙其事。恨乃梅川情有餘。而忠兵衛義膽不足耳。若潤色之。則應有勸懲之助也。先生願翻案之。予辭曰。鶴頸雖長、斷之則悲。鳧脛雖短、續之則憂。彼近松子者、近世才人也。以予之鹵莽、潤色。乃恐有犬羊補狐白之譏矣。書肆笑曰。先生不肯者、豈非以舐夫糟粕乎。夫左思三都賦。尚以三子之注解。而重于當世。遂合洛陽紙貴。先生何不傲焉。予於是不能辭。終施國字。陳俚言。以爲之翻案焉。號曰「古之花雙紙」。此書也不如前院本之遠矣。兒女輩讀之、勿笑予蛇足焉。

文化己巳春

顯麟陳人題



露光量違いの為重複撮影



香  
ノ  
一

五



古  
乃  
花  
双  
紙  
(  
梅  
川  
忠  
兵  
衛  
)

四

露光量違いの為重複撮影



右衛門 左衛門

四

露光量違いの為重複撮影



古乃花双紙 (梅川忠兵衛)

露光量違いの為重複撮影



古も花双輪... (vertical text on the right margin)





# 古の花双紙目録

## 上之卷

夫婦佛を祈りて子を産く  
賣僧に欺かれて愛子を失ふ

## 中之卷

一條の赤繩結ばれて百千の苦艱を醸す  
忠兵衛梅川互に身の履歴を語る  
孝を全ふせんとして却つて不孝の罪を作る

## 下之卷

靈牛靈を現して二人を濟ふ  
雪夜道を過つて再び危難に遭ふ  
園女姑を憐みて囚繫に換らんとす  
名器徳著くして惡に禍し善に福す

# 古乃花双紙

(梅川忠兵衛)

東都 歌醜陳人著

盈齋北岱畫

## 卷之一

○夫婦佛を祈りて子を産く

後花園院永享の頃、鎌倉官領、足利左馬頭、從三位源持氏卿、  
驕奢のあまり京都將軍家を蔑にし、逸樂擅なりしかば、執事上杉  
憲政屢々これを諫めつれど、さらに聴き給はでなかく、其間疎く  
こそなりにけり。然るに持氏卿の公達を賢王殿と申して、今年三五の齡

にたり給へば、加冠せさし給はんと申しけるに、基氏公の御時より家嫡たる公達の加冠は、京都將軍家のせさし給ふ例なるを、持氏卿驕慢心よりして、今世には我子が烏帽子親と頼むべき人なし。よりて遠祖義家殿に倣ひ、賢王をば鶴岡八幡にて加冠させばやと、其準備をし給ひぬ。上杉憲實これ聞き、こは不思議の結構なりと驚き、急ぎ持氏卿の御館に到り、見参して云出でけるは、誠や此たび賢王殿、鶴岡八幡にて加冠せさし給ふと聞けり。夫御當家御加冠のことは、公達上洛し給ひ、柳營に於て行ひ給ふか、しかあらざれば使を京師にやりて、大樹の御諱の一字を乞ひ給ふ其式三代に及ぶまで革めず、然るに今御前代の制に乗り、佳例を變へ給はん事然るべからず。もし此事京都將軍家より咎め給はば、何の辭もて分疏給はん、不如早く使を京

師にやりて、公達をもて柳營の冠子とせさし給へ。と諫めつれば、持氏卿冷笑ひて命せけるは、我不肖なりといへども、大祖尊氏公の後裔とし、世々此地方にあるをもて、東國干戈を動かさず、京都太平の易きを樂めり。是誰が力ぞや、渾我覆庇によればなり。さるものゝ子が加冠するをなどや、柳營に訴へ其命を待つて做さすべき、是までは鬼まれ角まれ、我に於てはさることをして民に謾られば、何をもて關東を制せんと、いと不興氣に看え給ひつるを、憲實尙諫めけるは、その思し差ひにこそ、今此鎌倉泰山の易きに居ること、ひとへに京都將軍家のあるをもてなり。殊に君なり、宗室なり、さるを爾蔑にし給ふこと、人臣の道にあらず、夫天道は侈を疾み給へば、君がごときは天必ず禍を下し給はん、もし某が言を聽き給はずば、願はくは速

に我首を刎りて、君の禍に逢ひ給ふ口を見さし給ふな。と強く折檻し奉れば持氏卿大いに怒らせ給ひ、汝我を輕しめ辱かしむるとの何ぞ甚しき、いで望のごとく首を刎りてとらすべきぞ。と御佩刀に手をかけ給へば、此時御側に侍りける一色左馬太郎兼親と云ふ者、慌忙しく止めまゐらせ、こは淺猿し憲實、いかで君を謾り奉るべき、彼は柱石の臣にして、國家の大事を思へば御心に逆ふことをも申すなり、熟くおぼしわき給へ。と諫むるに、其席にある處の近臣等、憲實を將て御前を去らし漸く事なくて止みにけり。然れどもこれより憲實は、職を辭して己が館、山内に塾居すれば、持氏卿今は誰に憚ることともなく、驕日々に超過し、終に公達賢王殿を鶴岡八幡に於て加冠せさし給ひ、義久公とぞ稱し給へり。こゝに一色左馬太郎兼親と云ふは、足利家系

世の臣にて、一族みな搢紳家なり。されば自然と人の用ひも他に異にして、いかに誇るとも心のまゝなるべきを、其性極めて廉直にして、文武の道に賢しといへど、よくその才を敝し、君に仕へて忠を盡し、朋友に交りて信を失はず、よくおのれを謹む人なりけり。然るに此程持氏公の御光景を見るに、一つとして人君の行状をばせさし給はで、只擅なることのみぞ多かりき。そがなかにも執事憲實が諫を用ひ給はで、公達賢王殿を八幡において加冠せさし給ふ體たらく、何事もみな將軍家の式に均しく、季氏が八佾に過たれば、時につれ折にふれて風諫し奉りしに良薬は口に苦く、諫言は耳に逆ふ常言のごとく、終に持氏卿の御氣色を損じ、御勘氣を蒙りしかば、鎌倉の住居なりがたく、何方に身を寄せんやと想ひたゆとふ處に、左馬太郎若かりしとき、京

都にて物學せしが、其時縁故ありて大和國布留の郷の郷士、桃井孫右衛門と云ふ者の女兒、園花と云ふを娶り夫婦睦じくてありけり。然るに今度の一件出來り、夫が深く愁ひつるを、園花さまに諫め慰め、親郷大和國布留の邑に忍び給へとあるに、左馬太郎素より二君に仕ゆる心なく、持氏卿非を革め給ふときを待つて、再び仕へ奉らん志なれば、妻が勧めにまかせ、夫婦諸共に大和國に赴き、舅がもとに到り、しかくの旨を告げ聞ゆれば、孫右衛門の云く、三度諫めて退くは臣たるものならひ、何か苦しからん、いつまでも此地方に居て、時の至るを待つべしとあるに、夫婦心を易んじこゝに潛居て世の光景を伺ふ處に、幾程もなく持氏卿謀反の萌あるよし其聞えありて、俄に京都より討手下り、終に鎌倉方討負け、持氏卿は永安寺において、自害し

給ひぬと聞えしかば、さりとともと思ひしことも甲斐なく、頻に世を厭ふ心ぞいできにけり。こゝに舅桃井孫右衛門と云ふは、其先祖は桃井何某とて、桃井直常等が一族なり。所領のことにつき、一族と争ふことありしに、其身理を持ちながら非におとされ、無念やるかたなく討果さんとしつれど、私の恨をもて兄弟に均しき一族を害んこと、祖先への不孝なり。と忽ち思ひを翻し、古の圓位に倣はんとしたりしかど、一人の親をもてりければ、これを養ふべきものなきに、やむなく大和國布留の郷に、纔なる知音あるを便り、こゝに居て農桑の業をしつ、親を養ひけるが、其孝心を天も憐み給ひてや、求めざれど漸く富める身となり、孝養心のまゝにし、易く親の天年を終らし、己も世を楽しく畢りぬ。今の孫右衛門に至り三代に及び、いよゝ家富み田園



數丁の主となり、いと目出度くぞ榮えけり。然るに孫右衛門妻には早く後れ、男女二人の忘がたみを殘せり、姉は園花とて則ち兼親が妻なり。弟を香橋といひて、伶俐生れなりしが、園花嫁して後歿命ければ、今は家を嗣すべき子なく、孫右衛門明暮これを悲しみ、心樂までありしに、此頃兼親夫婦鎌倉を退き、我家に來り寄食し居るを、斜ならず喜び、いかにもして家を嗣せばやとは思ひつれど、鎌倉の光景を伺ひ、言ひも出さでありけるに、今度持氏卿自害し果て給ひしかば、今は仕ゆる心もあらまじと思ひ、一日孫右衛門兼親に對ひ、子孫の斷絶せんことをなげき、足下我後となりてよと、よぎもなく云ひかけらるゝに左馬太郎我上を思ふに、世に發達べき身にもあらぬに、舅の後なきことを嘆き、切に頼み聞ふなれば、無下に難面からんも心なし。と

終に其望に應じ、桃井の姓を冒し、舅が名を譲りうけ、孫右衛門と改名しつ、家督相續してければ、舅の喜び大方ならず、正に泰山の易きに居る思ひぞすれと、薙髮桑門身となり、常に寺院に詣で、念佛三昧の外他事なかりしが、其年の暮七十餘歳にて、正念の大往生を遂げたりけり。夫婦は今更に、親の別れを惜み嘆き、喪事など厚く執行ひ、後懇に弔ひぬ。斯くて後孫右衛門は、世の光景を觀するに、おのれ既に四十に及び、妻は三十になりつれど、たゞ一子だにあらざれば、後の絶えんことを愁ひつるに、園花もおなじ心にて、甚心細く夫婦これを嘆き、我々此年に及ぶまで、たゞ一人の子だも出來ざるは、是や過世の因果、報來るとはあきらめながら、そも我々が此家を嗣げることは、舅孫右衛門どの、子孫の絶えんことを想ひ給へばなり。しかる

に其家を嗣いで子なき時は、舅の志を無下にするに似たり、いかにもして一子のあらまほしやと思ひけり。こゝに當國帶解の地藏尊とて靈驗殊に新なるぞおはしけり。そもくこの御佛と申すは、當初文德帝の後、染殿皇后、御懷胎あつて三十三月を経れど、皇子御誕生ましまさねば、醫陰の兩道術を盡し、天下の靈佛靈社に奉幣使を立てられ御禱ありしかども、其驗なし。こゝに春日の御神後の御夢に告げさせ給ふは、和州添上郡に、裙帶の形を顯はしたる地藏尊あり。是を念じ給はゞ、速に御平産あるべしとて、御夢は醒め給へり。后奇異の想ひをなしたまひ、やがて靈夢の光景を奏聞ありしかば、帝叡感ましまし急ぎ勅使を立給ひ、御祈誓ありしに、程なく皇子御降誕ありしとなり。是則惟仁親王にて、清和天皇の御事なり。それより伽藍を御建

立ありて、平産御歡の寺なればとて、帶解寺と號を給はり、參詣の人市をなしつるにより、里の名を今市とぞ叫りけり。かゝる因縁よりして、孕めるものはさらなり、子なきものも此御佛を祈るに、その靈驗新なれば、人皆信仰し奉りぬ。孫右衛門夫婦その御利益のほどを傳へ聞き、いざや我々も、彼地藏尊を祈りて、子を授らばやと打連て、帶解寺へ參籠しつ、一七日通夜して祈りけるは、南無歸命頂來地藏尊大慈大悲の御誓空しからずば、無量の愛憐を垂れたまひ、一子を得さし我々が後をあらし給へと、丹精を凝らし只願頼み奉りつるに、七日に満てる曉き寝ぬるともなく睡りたりしに、いとけやけき僧の香染の淨衣を穿き一朶の梅の花を携へ、夫婦が前に進み給ひ、汝等前世の因縁により、今世に於て子の縁に疎し。さはあれ他念なき赤心をもて、





我を頼むことの切なるに愛で、今得がたきの子を授くなり。と給へる梅枝を園花に與へ給ふと見て、愕然として睡は醒めたり。夫婦奇異の想をしつ、互に夢あはせするに、露ばかりも差はざりしかば、こは所願空しからぬ驗ぞと、冥助の程を感佩し、報恩謝徳の爲、香花を供へ經を讀み、拜謝して我家に還りけるに、幾程なく妻の園花、たゞならぬ身となりつるにぞ、夫婦信心いやましつ。尙安産あらんやうを頼み奉らめ、と數帶解に詣けり。一日いつものごとく、夫婦うち連立ちて詣けるに、比しも三月の下旬なれば、花に柳に枝を扱へつる光景は、實にも錦といひけん、奈良のしるしは残れるものをと、道すがらそこの山、彼所の溪を望み看るに、暮れ行かんとする春のかたみには遅櫻の散残り、岩つゝじの咲出づる風色にあくことなく、さすがに長

き春の日も、夕暮はやく覺ゆなる、山寺の鐘にうち驚き、家路に歸らんとするに、道の傍に旅客とおぼしく、三十に近く看ゆる賤しからぬ女子が、三四歳ばかりの幼子の絶入りたるを抱き、よと泣居るにぞ、孫右衛門夫婦はこは如何なる人ぞと、俱したる下女に問はすれば、彼女子いらへつるは、奴家は東國方のものに侍るなるが、此國に知音あれば、尋ね登りつるに、此小兒俄に病發り、斯ばかり惱むに、用ゆべき薬さへなく、今は助かるべうも看えず候。あはれ持あはし給ふ薬あらば少しく恵み給はれと、涙ながらに云ひ聞ゆれば、夫婦はいと憐れのことにおもひ、そはさこそ心苦しはおはさめ、幸ひこゝによき薬の候とて、腰なる印籠より、氣付やうの薬を出し與へけるに、不思議にもその薬小兒が喉を過るよとおもへば、忽ち聲を放ち泣出すにぞ、こ

れに力を得尙さまぐくに介抱すれば、只是一片の雲、一陣の風に吹散されたるが如く、頓に病は癒けるにぞ、旅の女子は更なり、孫右衛門夫婦も、俱に喜びあひぬ。此時、彼女子の云へりけるは、誠に御夫婦の御影をもて、此幼兒の再生することを得て、いかばかりか歡ばしく候、後日に尋ねまゐらせ、今日の御恩を報ひ申さん爲なれば、住ませ給ふ所と御名とを、聞えさせたびねとあるに、孫右衛門云ふ人の難に臨むを看ては、奈何なる人にもあれ、知らず顔に過ぐべき。孟子の宣はす、孺子の將に井に入らんとするを見ては、皆怵惕惻隱の心あり、さることなきは人にあらじとあり、我も又人なり、かばかりの事を做て、いかで謝を受くるの心あらんと、回應すれば彼女子深く感じたる面持にて、世には御夫婦のごとき、君子もおはすものかな。さる御意

ばえあるに、強ちに問ひまゐらすこと、心なきに似たれど、人として禮なきは禽獸に均しといへり。今日の如き厚き恵をうけながら、そが儘にやむに忍びん、奴家が身の程をも聞え申すべきに、御名を知らし給へ。素奴家は鎌倉にて由ある人に給事せしものなるが、去年の亂に主家亡び給ひつれば、主のわすれがたみたる此幼兒を抱き、信濃國に逃れたれど、そこさへ住憂く此大和には、舊知識あれば、夫を便りて登りしに、其人今は都に居るとも、又東國に下りぬとも聞けば、まづ都を尋ねんと、此處に来つる處なり。と聞こゆるに、夫婦は鎌倉のものとも聞かざるに、去年の亂に主家の兒を携へさすらへ、來つといへば、必定持氏公の頭人のうちにや、兎まれ角まれ鎌倉の光景、委しく聞かんものと思ひしかば、さてはおんみは鎌倉の人にておはしつ

るにや、我も彼所には由緒あるものにて、此國布留の郷に住む、桃井孫右衛門と云へるものなり。鎌倉のことをも承りたければ、今宵宿り給ふべき方もおはさずば、我家におはして、一夜を明かし給へとあるに、彼女子いと嬉しげに、かさね々御憂恤を蒙ること、感佩身に餘りぬ。御住所をも知るなれば命にまかせ、今夜の宿りをねぎ奉んと、回應するに夫婦喜び、そは喜ばしいざ給へと誘引つゝ、我家に伴ひ還り、夕饌などしたゝめさし、ひそかに其素性を尋ね問へば、女の云ふやう、今は何をか包み申さん、奴家は持氏卿の御内、一色直兼殿と申すに給事せし、道芝と申すものにて侍るなるが、直兼殿は持氏卿と俱に亡び給ひしほどに、その妻子血屬を捕へんと、兵どもの鎌倉中を、ひしめき歩くに、奥方と此若子残り給ひしが、さる危ふき處に

は忍ばしおきがたく、二人の主を誘ひ信濃に縁由あれば、彼國に走り潜み居たりしに、奥方は直兼公に後れ給ひし物思ひにや、ふかき病氣にかゝり給ひ、終に彼所にて失給ひぬ。残り給ふは此若子なるが、鄙に生育せ申さば、一生埋木となるのみか、萬不骨にて便悪ければ、奴家が伯父なるものは、素直兼公に仕へけるが、さる縁故ありて、今は此大和に居れば、これを使いて登りしに、近頃は其處には居らで、東國へ赴きしといひ、または都に居るとも聞けば、まづ都にのぼりて其在家を捜ばやと、おもひ侍りぬと語るに、孫右衛門驚き、さてはしかありつるにや、我こそは一色左馬太郎兼親といひて、直兼とは親しき一族の中なりしが、いさゝかの事よりして、疎くなりし程にそこをば看しらでありけり。其子は直兼の子とあれば、我とは縁由あるものな



卷ノ

三三



古乃花双紙(梅川忠兵衛)

三二

るに、心をおかで何時までもこゝに居よかしと聞ゆれば、道芝且つ驚き且つ喜び、かゝるべしとは神ならぬ身の知らざるこそ愚なれ、今よりしては此若子の力となり給はれと、暗夜に燈火を得たるおも、ちしつ、終に此地方に足をとめけり。さても孫右衛門夫婦は、道芝が忠やかなる志を憐み、我家に久しく仕へけるものに、貞輔とて甚老實なる男のありつるが、これと道芝とを夫婦にせば、似合しかるべしとて二人に其事を云聞かすに、貞輔も道芝も夫婦が志のほどを歡び、仔細なく諾ひしかば、俄に吉日を卜び、婚縁を整はしけり。斯て後道芝は、伯父なりけるものを尋ねしに、京の三條に龜屋忠平とて、諸國への飛脚を請負ふをもて經紀とするものあり。是則ち其人なれば、我身の程を告げやりぬ。此忠平もと一色直兼が家の子なりしが、若氣の

過にて、粧ひ坂通ひに主の金を失ひ、贖ふべき術なく、おのれと身を退しが、今はやゝ富める身となりしかば、先非を悔ひ、主の勘氣をゆるされんことを想へど、既に主家亡びつれば、志を果すによしなく、兎やせまじ角やせまじと想ふ折から、道芝が訪問を聞き、斜ならず喜び、其まゝ孫右衛門がもとに來り、夫婦の好意を篤く感謝し、直兼が子も、道芝をも共に誘引はんとせしかど、貞輔が妻となりつればこれをば其儘に留め置き、直兼が子のみ伴はんと乞ふに、道理あれば孫右衛門夫婦、その心にまかせしかば、限りなく喜び、これを伴ひ歸りしかど、主の子と云はんは憚りあれば、世には道芝が子を貰ひ、我養ひ子にするよしを披露したりけり。不在話下且説蘭花は、地藏尊の冥助により、孕てよりあたる十月に及びいと易らけく、玉のごとき

女兒を産しかば、夫婦の喜びたとふるに物なく、靈夢に梅の花を賜はりたればとて、これにかたどり、この花とぞ名付けたり。こは梅をこの花と云ふにやよりけめ。斯てより只是掌の玉、挿の花と慈愛み、生育つるに光陰の過ぎ易きは、隙ゆく駒のごとく、日月はやく過去つてこの花既に三五の齡になりけり。實にも地藏菩薩の授け給ひし驗には、天性の美色は玉を欺き、艶弱たる麗姿は、花も羞ふばかりなるに、心ざまさへ優にやさしく、国歌絲竹の道よりして、萬女子の傲すほどのわざに賢かりしかば、父母は更なり他人も、この花を知るものは、その才と容貌のいみじきを、愛たからざるはなく賞しあへりしかば、其名遠近に聞えて、あこがれ慕ふもの少なからずありけり。

○賣僧に欺かれて愛子を失ふ

且説この花が艶やかなることそのかくれなく、遠近より氷人をもて、これが婿たらんことを乞ひ索むるもの多かりしかば、夫婦は深くこれを惱み、吾家世嗣なく、子孫の絶えんことを愁ひ、御佛を祈り漸くにしてもうけたる女兒を、他に嫁さんは素より心にあらず、只然るべき贅婿を望み想ふなるに、かばかり婿とならんことをいふもの多きを、その中より一人を選び迎へば、争ひの仲人をするに均し、我兒もと地藏尊のもうし子なれば、彼御佛のみはからひを頼み奉りて、女婿を定めんにしくべからずと、夫婦諸共にこの花を誘ひ、帯解寺へぞ詣でけり。こゝに此帯解寺の現住を、寂巖和尚とぞ申しけり、生質貪欲にして、酒色を好み、佛の戒をば露ばかりも用ひざる、賣僧なれども、飽まで奸智深く、殊に妖術を行ひつれば、形容をば甚殊勝げに粧ひ、巧

言し折々は幻術をもて、さまざまの不思議を顯し人の心を迷はし、幾許の錢財を欺き取り、これをもて人しれず色に遊び、酒を樂しむといへど、さらに知る人なかりけり。孫右衛門は此地藏尊を信仰するのあまり、寂巖がかゝる悪僧なることは、露ばかりもしらで、此御寺に參詣しつる序には、立よりなどせしほどに、何時となく親しくぞなりにけれ。寂巖は孫右衛門が陶朱の富を保てるをば豫てしりつ、其金銀を貪らんがために、さまざま巧言令色しかば、孫右衛門聰明と雖も凡夫の身なる故に、信じ奉る御佛の住侶なれば、いつしか其巧言に騙らかされ、ふかく寂巖にまよひ、またなき僧と思ふから、何くれのこともうらなく語ひ、萬これと商議して事を定めけり。しかるに此度女婿を定めんには、いづれか然るべからんと、地藏尊を祈り佛意に任せ

んと、親子三人して詣で、深く祈念し奉り、その下向の折から、方丈に立寄りかくと案内するに、寂巖迎へ請じ、煙茶を餐しなどしつ。偶とこの花を見るに、その艶やかなること譬ふるに物なく、此世の人とも思はれねば、好色の寂巖猛然あだ心動き出で想へらく、思はざりき此女兒が容貌のかゝるべしとは、豫て聞及びつるよりは、遙に増りて見ゆるものかな。世に男子たらんもの、甲斐には、此の如き佳人と同枕の契をなしてこそ本意なれ、我奈何して思ひを果さめ。と心も空にしばらく貪看てありつるが、夫婦の不審んことを恐れ、早くも放蕩心をおさめ、人々に對ひ、今日は何等のことありておはしつるや、問ふに、孫右衛門回應けるは、問ひ給はずとも聞えまうさでは叶はざる事のはべりて、もう來候ひぬ。これに俱したるものは、某が女兒此花と



申すものにて候、此兒がことはかねて知らしまゐらすごとく、地藏尊の神授兒にして、子といふはたゞ此女兒一人なり。しかるに齡もはや十五歳に及びつれば、然るべき婿を迎へんと想ふなるに、近頃遠近より贅婿にならんことをいふもの少からで、何れを婿としてよかるべきを辨へねば、此御佛の御はからひに任さばやと、今日し詣で侍りぬ。上人願くば我爲に祈禱をなし、佛意を伺ひ給はれと、慇懃に頼み聞ふれば、寂巖熟ととうち聞き、心裡にはいかで此艶女を人の花となすべきと、想ふといへどさあらぬさまにて應答へけるは、御物語りを承はればさこそ思ひ迷ひ給ふらめ、命の如く菩薩のみはからひに任せ給んと然るべう覺ゆれ、貧道丹誠を抽んで、好く祈り申さんに、などて納受のなかるべき。と頼もしげに肯へば、孫右衛門父婦こよなく喜

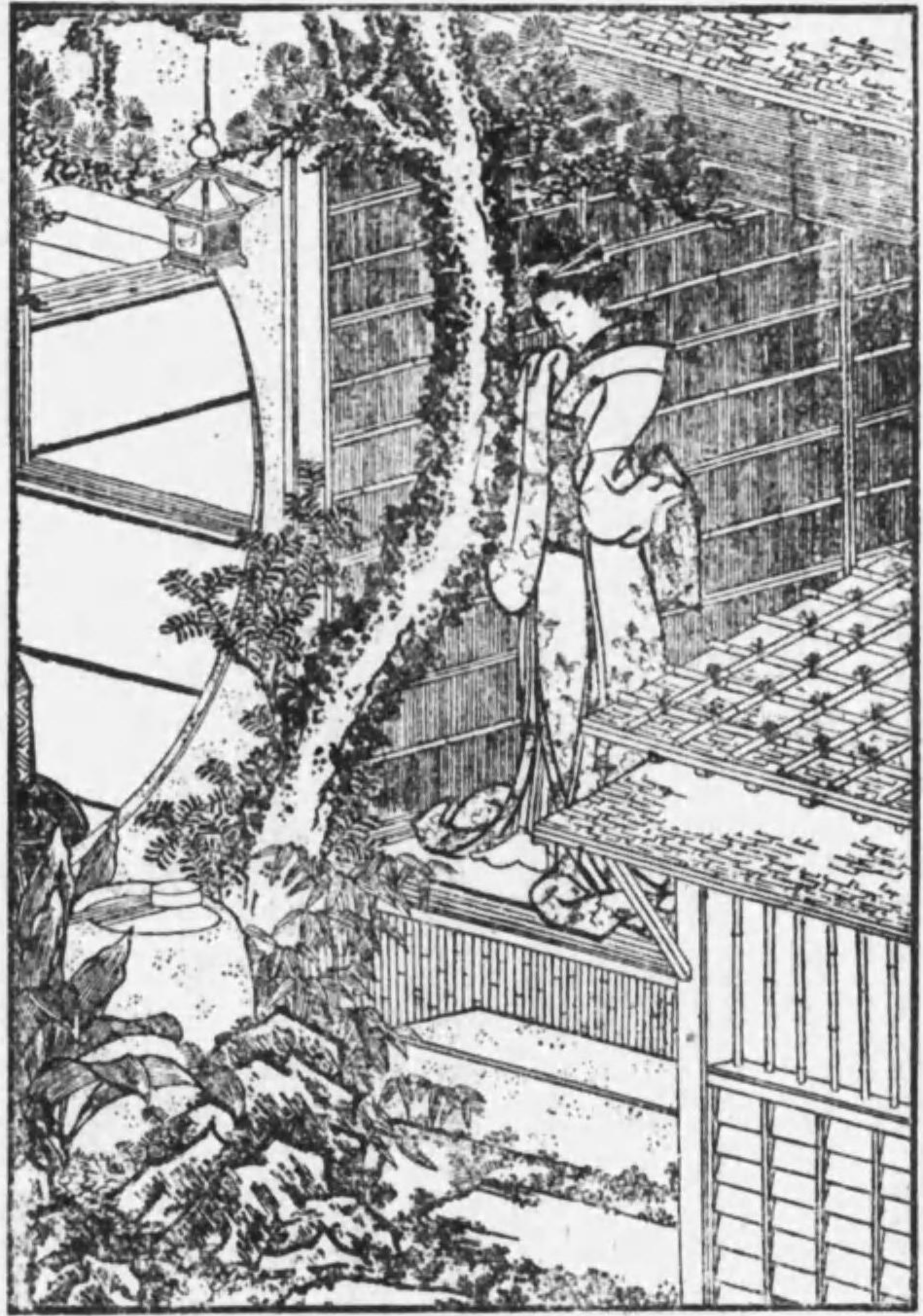
び尙こまなくと頼み聞えて、我家にこそ歸りけり。斯く寂巖は此花が事を忘れがたく、依と戀として想ひ煩ひ、奈何なる謀をもてか彼を得べきと、とさまかうさま思案しつるに、忽ち一計をもうけ出し、獨點頭き俄に沐浴齋戒しつ、禱のこともありと披露し、一室なる處に閉籠り、經を読むの外他事なかりけり。且説這裡は、孫右衛門父婦くれぐれも、寂巖を頼置き、女兒を誘ひ我家に歸り、心やりて寝たりしが、更たけて門を音のふ者あり、孫右衛門遙にこれを聞き、誰なるらんと想ふうら、門守の下僕立出で、何とやらん問應する聲して、忽ち下僕孫右衛門が前に出来て云ひけるは、何事に候やらん帯解寺より一人の御僧おわし、家公に相見ことを宣ふなるが、何と回答申さんやと云ふに、孫右衛門これを聞きて想ふやう、今日しも寂巖和尚に祈の

頼み置しに何事ありて、今夜深きに彼所より、御僧のもうき給ふや  
んと、不審つ、下僕に對ひ、苦しからじとて這裡に請じまゐらせよ  
云ひつゝ、慌忙しく臥所を立出で、衣服を改め、客堂に出てこれを見  
れば、怪しひかな前年帯解の御堂に於て、夢中に見え給ひたる地藏菩  
薩によく似たりしかば、驚き想ふやう、今日女婿のことを頼み奉りし  
に、其善惡を告げも給はん爲に來り給ふにかと、信心膽に徹り、感  
涙頻りにはふり落し、只手を合し拜伏ば、彼僧いとけやけき聲して、  
善哉孫右衛門、今日女兒此花がことを我に禱るといへども、此事我力  
には及びがたし、我を頼まんよりは、住侶寂巖を頼み、彼方に女兒を  
送らば、自ら良婿を得て、子孫いよ、繁榮すべし。もし此ことを疑ひ、  
此花を家に置かば、不料禍に遭はんこと近きにあり、必ず我言語を

乖きぞと、宣はすとひとしく光明赫々とし、一室のうちに満ちて、  
眩きまでに拜まれ給ふと見て、愕然と睡は醒めにけり。是則ち南柯の  
一夢にして、甲夜の臥所にてありしかば再び驚き、冥助のほどを感佩  
しつゝ、急に渾家を呼び醒し、夢中の光景を物語れば、園花不思議の想  
ひをなし、感涙にむせびつゝ、云出でけるは、あな有難の御佛や、前に  
子なきことを嘆き奉りしに、靈夢を蒙りて此花をもうけぬ。今また其  
兒に夫をあらしめんとして、再び夢告あること、更に疑ふべきにあら  
ず、きはめて良縁を結ばし給ふならん、明日はとく彼所に往き給ひて、  
上人をよく頼み御告に任せ給へとすゝむるに、孫右衛門も同じ心なれ  
ばこよなく喜び、女兒を送りやることなどよく、商議し、其夜は終  
夜寶號を唱へ經を讀みて明しけり。今這孫右衛門が、夢を看たりし一

件は、寂巖此花の色香に懸想し、佛を餌にし、幻術をもて夢を看さし、これを奪はんとする術なり。前に寂巖が沐浴して禱ることありとて一室に閉籠りつるは、此幻術を行はん爲にこそ、嗚呼此賊僧奈何なれば斯く毒惡なる畢竟何の佛罰をか稟く、そは卷尾まで往々分解るを看てしり給へ。さて天明にもなりしかば、孫右衛門疾く起出て準備そこくにし、急ぎ帶解寺に詣で、まづ御佛の御前に到り、香華など奠へ、昨夜の靈夢の告げを拜謝し、尙女兒が行末を守護せ給へと頼み奉り、それより方丈に至り、寂巖に對面し世通の應答濟みて、後云出でけるは、某昨夜不思議の靈夢を蒙りたるにより、密に上人を頼みまわらせん爲參り侍りぬ。暫時左右の人を退かし給はれとありしかば、寂巖心裡にはこは謀なり得たりと喜び、急に左右の人を退かしめ、孫右衛

門が側近く居より、欺いて云へりけるは、只今宣はずを承れば、昨夜佛の御告ありしにより、もう來給ひぬとあるはもし此花ぬしのことならずや。とあるに孫右衛門驚き、爾りそは何としてか知り給へると不審ばさん候貧道も此夜地藏尊の靈夢を蒙りはべりぬ。たとへば御堂の裡に、經を讀誦してありつるに、御佛現れさせ給ひ、孫右衛門が女兒は我授けたる子なれど、過世の因果によりて、不思議の禍に遭ふべし。其事の不便さに、しばし此寺に忍ばして、彼が難を免らせんと想ふなり。よりにて汝しばらく此花を藏匿べしとの御告なり。然れども貧道、齡班白にも及ばざれば、今艶やかなる小女を預りなば、世の聞え人の誹をうけんことの懶ければ、佛の命にはあれど肯ひがたくはべりぬと、誠しやかに物語れば、孫右衛門これを聞き感涙に咽びて云



へりけるは、さては上人もさる御告を家り給ひけるにか、某が看たりし夢にも女兒此花は過世の因縁によりて、不圖難に遭ふべきほどに、御僧を頼み預ぐべしとの靈夢なり。如斯新なる佛の御告あれば、この花を藏匿給ふとも、上人いかに冤罪の汚名を蒙り給はん、枉て此事は夢想に任せ給へ、聞くなはく僧たるものは、衆生濟度するを主本とすと承はりぬ。さるを今佛の告に乗り給ひ、我女兒を預らじとせさしたまは、某が一家いかなる禍にかあひ、家をも身をも亡はんも知るべからず。此ことよくよく察し給へとあるに、寂巖其言語に伏しつる而持し、宣はす處渾道理に侍れば、佛の告にまかせ、令愛をしはし預りまわらすべし。さはあれさすがに公にせんこと然るべからず、よりてまづ明日の夜、此花どのを長櫃に入れ、人しれずおくり給へと

云ふに、孫右衛門は其速に領掌しつるを深く喜び、然らば明宵命のごとく、密に女兒を送り参らすべければ、よきに圖らひ給はれとよく頼みおきつ。急ぎ我家に歸り、妻の園花に對ひ寂巖も同じ夢の告ありしこと、且女兒を明宵彼寺に送るべき術など、委しく云ひ聞ゆれば、園花も限りなく喜び、女兒此花を密かなる處にまねき、斯と告ぐるに此花は、此年頃深窓に養はれし身のしらぬ寺にたゞ一人行くことなれば、照君の胡國に嫁げる心地しつ、いと悲しくは想へども、父母の命といひ、殊に佛の告とあるに詮術なくて心にはあらねど、親の命の重ければ、涙ながらに帯解へ行かん回應をしたりけり。こゝに家の子貞輔は、道芝を妻とせしもち、主の孫右衛門より幾許かの田地を與へられ、別に家作してこれに住み、時々主家に通ひ、萬づを司ること

昔にかはらで、忠やかに奉公せり。然るに此花が生れし年に、貞輔も一人の男子をもうけぬ、名を忠三郎と付けたり。其性質親に似ていと恰憫く、老實なりしかば父母は更なり、主の孫右衛門夫婦も慈愛を加へぬ。斯く一方ならぬ家隸なれば、今度此花を帯解へ遣るをば、深く秘めることなれど、彼にのみは告知らさばやと、其翌日招きよせ、密に靈夢のことよりして、今夜女兒を彼所に送らんとする、首尾を細やかに物語すれば、貞輔しばらく回答せずありしが、やゝありて云出でけるは、某愚なる心もて、靈夢を疑ふこといと畏みたるには侍れど、いさゝか心得ぬことこそ候なれ。いかに御佛の御告なればとて、深窓に生育給ひたる此花ぬしを、たとへ羅漢ばかりおはす御寺にもせよ、艶麗なる小女子を只一人送り給はんこと然るべうも覺えず、

夫夢に六つあり、一に正夢、二に噩夢、三に思夢、四に寤夢、五に喜夢、六に懼夢なり。前年看給ひしは正夢にて、今度み給ふは思夢なり、故はいかになれば、前にはたゞひとすぢに、子を授け給はれとのみ禱り給ひて、他念なきに看給ふなれば正夢なり。今回は此御佛の授け給ふ子の、身の上を祈れば、必ず靈驗あるべしとおぼす御心より、さるしらなくしき夢をば看給ふなるべし。いかに佛の神變あればとて、幾回か夢をもて告げ給ふべき、正法に不思議なしと、古人も云はべるに、寂巖和尚の同じ夢を看しといふも心得がたき事なり。兔まれ角まれ、よく慮り給ひて、此花君を寺に送り給ふは、しばらく止り給へ、某よく其實否を糺し、爾して事を議給へ。と諫むれば、孫右衛門眉を皺め、あな冥加なきことを云ふものかな汝も知るごとく女兒は

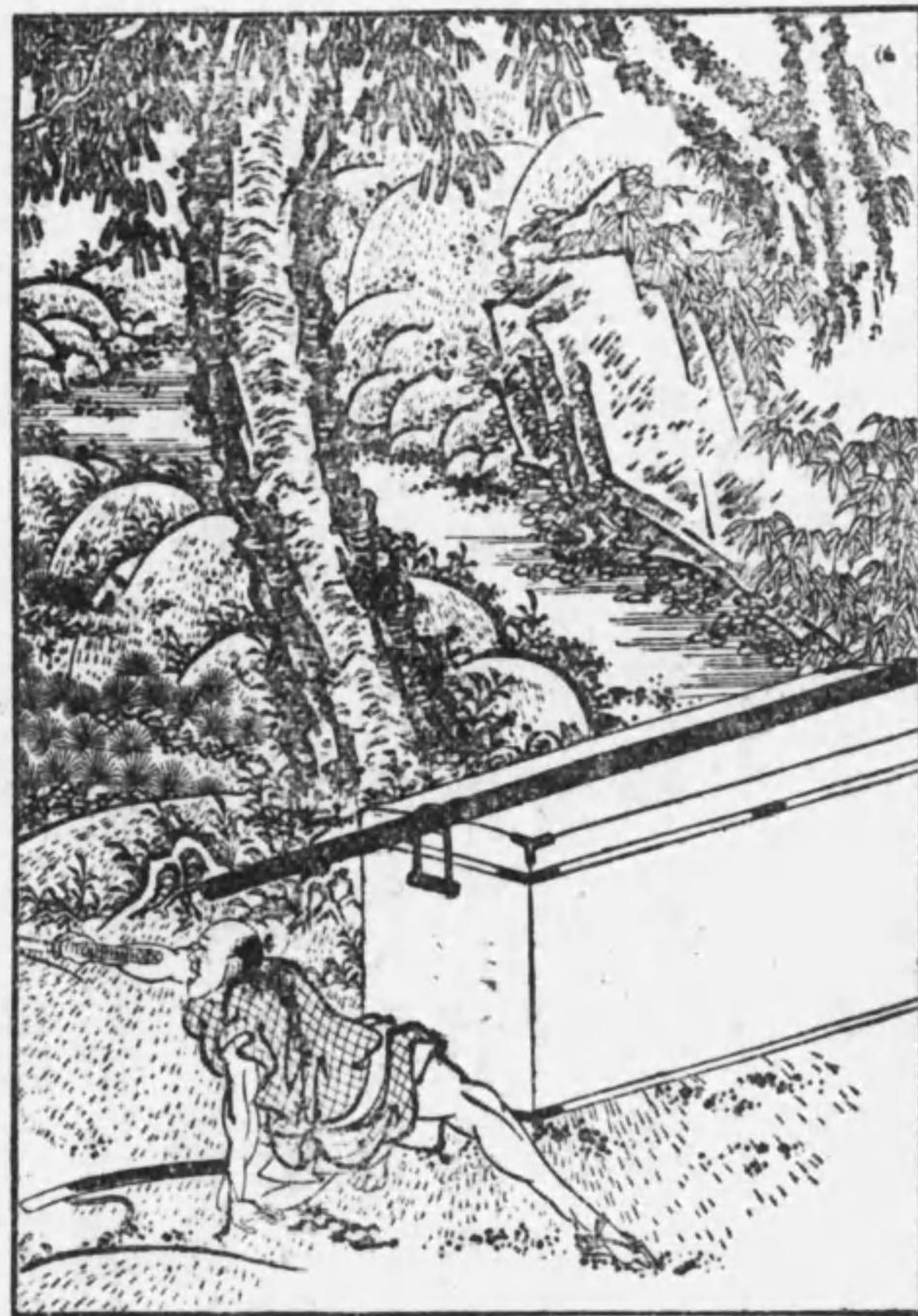
素彼御佛のもうし子なれば、いかで悪かれとの御はからひあらんや、  
 縁なき他の神佛すら謾り奉れば、忽ち冥罰を蒙るなるに、況いて深  
 き因縁の地藏尊、露ばかりも疑はゞ、奈何なる御罰を受けんもしるべ  
 からず、かまへてさる事ないひぞと、夢いさゝか肯ふべき氣色あらね  
 ば、貞輔はやくこれを猜し、心裡に謀をさだめ、俄に面を和らげ、  
 斯まで想ひ定め給ふからは、再び諫むべきにあらず、この上は靈夢に  
 まかせ、今宵密に此花君を、彼處に送り給へ、某途の衛をし侍らん  
 と云ふに、孫右衛門夫婦斜ならず喜び、汝かしこくもはやく疑ひを晴  
 し、さる心になりしこそうへなきことなり、さらばその準備せよと、  
 何くれのこと細やかにとりしたゝむるに、はや初更の頃ほひになりつ  
 れば、やがて女兒を一合の長櫃に忍ばし入らんとするにぞ此花は豫て

覺悟はしつれども、父母に別れの哀しくて涙ながらにいざなはれ、暇  
 乞さへそこくに、長櫃の側に立よりぬ。然るに此頃世に撫牛といふ  
 ものを弄ぶことあり、そは奈何なる物ぞと云ふに、磁器にて牛の形を  
 製作、これを常に居る處に据ゑ置き、朝夕按撫れば吉事來つと、専ら  
 もてはやせるに、此花わきてこれを弄賞し、束の間もおのが側を放さ  
 でありしが、此折も尙持行かんと、兩手にさゝげ長櫃の裡に入らんと  
 す。ときに不思議やこの撫牛の口の邊うごめくよと看えしが、忽ち一  
 道の白氣を吐出しつるが、其氣帯解の方にたちなびきて消え失せぬ。  
 人々奇異の想ひをしつ、吉凶奈何と怪しめど、時刻過ぐるに是非なく  
 も、泣居る女兒を慰めて、長櫃の裡に助け入れ、全く衣服など入れた  
 るていにもてなし、健やかなる家僕二人に昇荷はし、貞輔これを監押

しつ、帯解さして急ぎけり。そもく、此孫右衛門が性、老實にして粗もの、道理を辨ながら、奸僧寂巖が爲に欺かれ、貞輔が諫を聴かず、女兒をひとり彼所に遣るは、是何の所爲ぞや、正しく過世の因果により、一件の禍にかゝり、此花をして百折千磨をなさすべき發端なりと、知らざることこそ方見けれ。斯て貞輔は長櫃を監押して急ぎしに、桃尾と云ふ處にぞ徑過ぬ。此地方は片へは仰ぎ見るがごとき山にて、片へは目も及ばざる郊原なり、此野には野畜の牛の住める處なり、しかるに此時は六月中旬にして炎熱烈しく、夜に至れど猶人を蒸して堪へがたきに、二人の僕は重きを荷ひ來つることなれば、此處に至りていたく勞れ、喉さへ渴き一步も進むこと能はねば、貞輔これを憐み、とある處に長櫃をおろさし、少刻憩ひ候へとあるに、二人は喜びまづ喉

を濡さんと、流を索めに去りしかば、貞輔はひとり残居て、休らひ居る所に何ぞ料るべき、後なる林の裡より、一筋の矢漂と音して飛來り、脊梁より胸間の邊に鏃白く射貫けば、窮所の痛手になどて堪ゆべき、阿と叫びて俯しに轉びしかど、大事の監押ぞと想ふ心の一筋に、自ら志を勵し、腰間なる刀をぬきもてこれを杖とし、やをら立止りつ箭の來りし方を睨まへたる折から、林の茂みの裡より一人の大漢顯れ出でたり。その扮打いかにとなれば、身に黒き衣を纏ひ腰に一口の朴刀を帯び、左手に弓を携へ、右手に箭を握み、悠々と歩み出で、貞輔が爲體を看弓矢を撲地と投棄て、氷なす刀をぬき閃かし、斬つてかゝれば貞輔聲を勵し、卑怯の賊、いで尋常に勝負せよと、戦はんとしつれども、窮所の深手に眼くるめき、心神惱亂して、とある木の根に蹶





き轉べば、賊は得たりやあふと斬る太刀に、兩斷となりて失せけるは、  
 憐れはかなき光景なり。賊は血にまみれし刀を拭ひ、貞輔が屍をば、  
 くぼかなる處に蹴込みつゝ、さて長櫃の蓋を披き見るに、こはいかに  
 いと艶やかなる小女の、戦き居るにぞ、按に相違し少刻呆れてありつ  
 るが、やをら心をおししづめ、我は此長櫃にはよき小袖などの多くあ  
 るよと想ひきや、かゝる活寶のあるべしとは、なまなかの財寶より遙  
 に増りしものなりと、此花が手をとつて、櫃の裡よりひき出して云ふ  
 やう、御身は是何人の女兒にて、何等の縁故ありて、此裡に忍びおは  
 すぞと問へば、たゞよゝと泣くのみにて、更に回答をせず、只願逃走  
 らんとする面持なれば、賊はさはさせじと豫て準備やしたりけめ、  
 袖のうちより猿轡を取り出し、口にはましつ。是非なく牽いて走らん

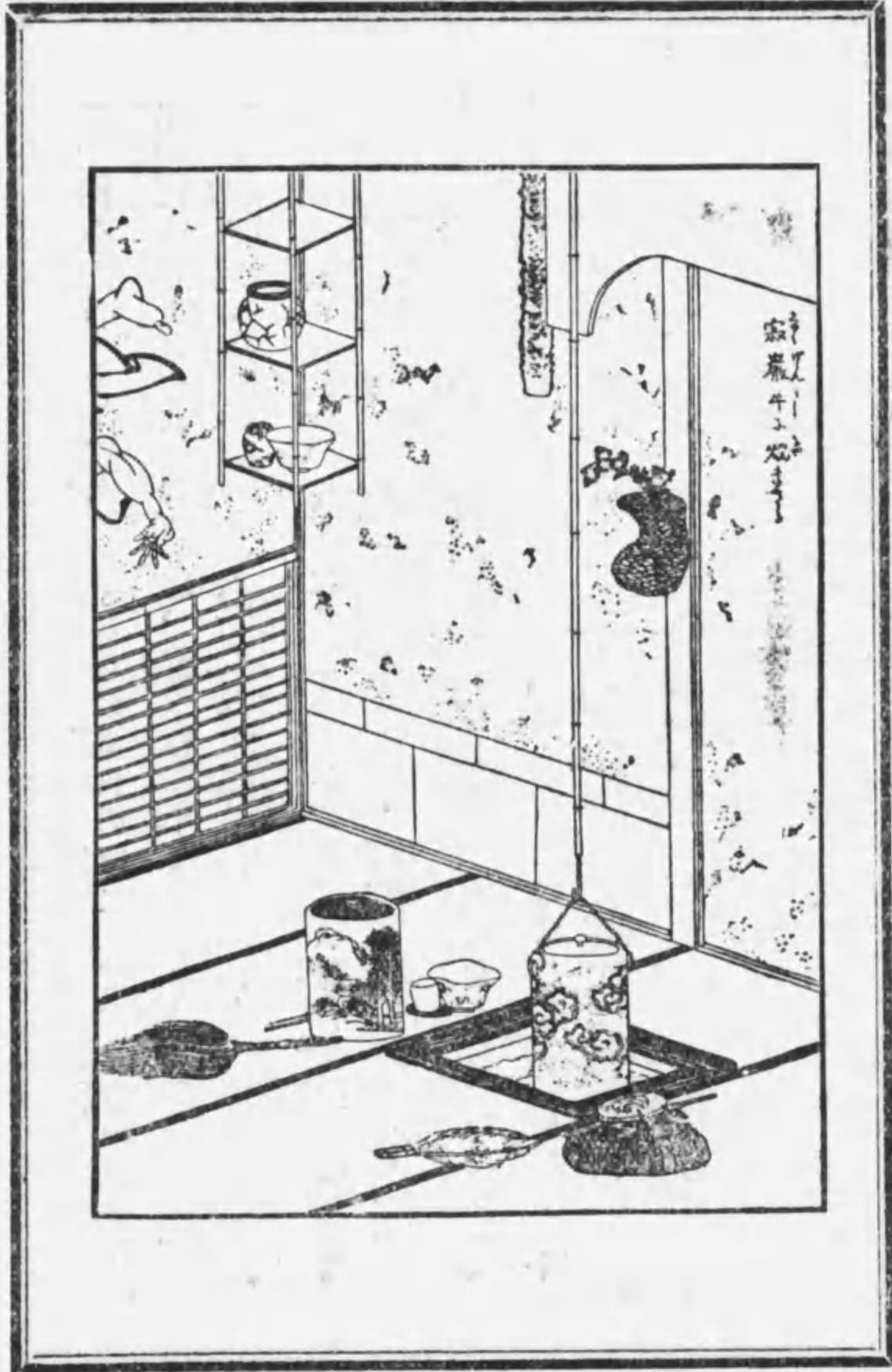
とせしに、此側に臥居たりし、子牛のありけるに、蹶き仆れかゝれば  
 牛は驚き焦ちてふたつの角をふりもたげ、賊を目がけむかひ來るにぞ  
 はやくも起かへつて敦圀しつゝ、悪き畜生のふるまひかなと、大手を  
 ひろげ引捕へ、彼長櫃の裡におし入れ、慌忙しく蓋を掩へるそのはし  
 に、此花は遙に逃れ去りしかば、賊はいたく腹たち、よしなき牛に妨  
 げられ、優曇花にひとしき艶美女を取逃すこそやすからね、爾はあれ  
 彼、何處までか遁すべきと、後を慕ふて追行きぬ。そも此盜賊は、此  
 何等の人ぞと想ふに、猪俣の丑太といへる強盜なり。原はよしある武  
 士なりしかど、性質貪欲にして、不良のこのみ多く、終に其職を失  
 ひ、浪々の身となり、世を渡るべき便宜なく、此邊に躲れ住み、緑林  
 赤眉の徒となり、或は財寶を奪ひ、あるひは人を斬害すること多く、

實に毒惡の賊なり。今夜孫右衛門が家より、長櫃を荷ひ出せるを密に窺ひ見て、心裡に想ふやう、こは豪家より出でたるものなれば、さこそよき寶貨ならめと、後につひて此地方まで慕ひ來りしに、往還の人も杜絶えするさへに、二人の家僕は水を索めに行きぬ。跡には貞輔ひとり長櫃を護居るを見て、よき折こそと、この體たらくには及びつるなり。儲も此時前刻に水を索めに行きつる下僕、漸く立還りて看るに、長櫃はその儘にありながら、貞輔の看えざるにぞ、いと不審四方を探し、聲のかざり呼べどたゞ、木魂の響のみにて影だに看えねば、二人の下僕は大に怪しみ、こは是只事にあらず、かゝる幽陰の地に、夜ひとり居たまひつれば、狐狸などの騙かして誘ひ行きつるならん。しかるを尋出さんとせば、天明に及ぶとも尋ねあたらぬのみか、此長櫃も

氣遣く又我も如何なる目に遣はんするも知るべからず、甲夜に老爺の分附給ふを聞くに、此長櫃は帯解寺へ送れよと宣すなるに、これよりは彼所へは近く家には遠し、貞輔哥々の見えずなりしを、今歸りて告げんは、老爺の志を無にするに似たり。まづこれを帯解に送りといけ、爾して此體たらくを告げば、なか／＼に我々が落度はあらじと商議しつ、終に長櫃を荷ふて帯解へこそ急ぎけり。程なく彼所に到着しかば、斯と案内を乞ふに、寂巖和尚甲夜より待侘びたることなれば、斜ならず喜び、自ら立出で、荷ひ來し僕を厚く勞ひ、酒錢など與へてこれを歸らし、弟子の青法師等にいひつけ、彼長櫃をおのが臥所にかき入れさし、今夜は更たけつらん、とく寢よと人々を退かし、其眠るを待つことひとへに一佛出世の想ひをしつ。兎角するうちみな熟睡

しつると覺えて、甗の聲のみ聞えて密やかになりしかば、さらば此花を出さんとして想ひけるやうは、わがかく懸想することは、彼兒は露ばかりも知らであるべきを、今明白に云ひかけんは、さすがに面ぶせなりと、俄に燈火をうち消し、やがて長櫃の蓋を披き、いかに此花のぬしさこそ鬱し給ひつらん、今は人の知ることなし、心をおちいて此方におはせよ、燈火ありては人の漏知らんことを憚り、わざと火はかゝげず候よなと、いと念頃に云聞ゆるに、此とき牛は前刻より櫃の裡におしこめられ、いたく苦しみつるが只今蓋をあけられたるに、喜びおどり出て逃去んとするを、咫尺もわかぬ暗夜なるさへに、一途に思込みたる春路の、今夜あふせの嬉しきには、魂魄飛天外いかでよく辨ふべき、こは恥らひてなす所爲ぞと想ひ、やよ君よいたくな逃給ひ

ぞ。抑今夜のことは是、一方ならぬ過世の縁にして、此寺の地藏尊の示現によりてなすわざなれば、譬へ心に叶はずとも、枉て妹脊の語らひを結び給へとよりそへば、牛は驚き飛除く拍子に、臀尾閃き寂巖が、法師頭に觸れければ、こよなくよろこび、さては孫右衛門のぬしも、菩薩の告を猜し、我と婚縁をさせばやと、俗家の式にならひ、下髪さしておくり越しつるにか、かくあらば貧僧も、衣服をあらたむべきに、衣裳もさこそ愛たくやおはさんと、手をさしのばしてさぐりみるに、若牛の毛のことに和らかなれば、こは天鷲絨の帯やし給ひけめと、またかた手をもて探るに角を捉へしかば、あな大きやかなる簪しを挿給ふものかなし、肉麻く附纏はれば、牛は大に焦ち、もうと一聲呻きしが、忽ち兩角をふり立て、寂巖を空さまに投上れば、はじめて此花



ならざるを知り、早く逃れんとすれど、前に四方を堅く鎖したる上に、暗夜といひ心周章れば、急に戸を開くこと能はず躊躇うち、牛はいよ／＼たけり狂ふにぞ、今は堪へず聲を上げ、あな苦し助けてよと呼はるに、青法師等睡を醒し、何事にやと會集來つ、紙燭して看るに、和尚の臥所の裡、物圍がしかりしかば、いと怪しみて披かんとすれど、固く戸ざして聞かざるを表より無體に引開れば、一疋の子牛飛出るに續いて寂巖も走出でたり。法師等はこれを見て、愕然と驚きまどふ其うちに、和尚も牛ももろともに、去向もしらず逃去りけり。今此寂巖が寺を出奔せずともあるべきを、己れがなす奸計、人はしらで咎めざれど、身の過ちに我から恥ぢて逃去りつることを、偏に佛を餌にし、邪姪を行はんとする罪、忽ち報ひ來て、想ふ人にはあらで牛の來つるこ

となど、正しく佛罰とこそ想ひ知らるれ。昔より隱惡の僧死して、牛に生を變ゆると云ふことはあれど、此寂巖は生きながら、牛の爲にさしも大寺の住侶たりし身の、忽ちよるべなき身となること、さぞな深き罪障あるにこそ、扱弟子等は呆れまどひつ、其行衛を探しけり。

卷之二

○一條の赤繩結ばれて百千の苦艱を醸す

こゝに二人の下僕は、帯解を出て急ぎ家に歸り、告聞えつるは行途桃尾にて爾のこと侍りて、貞輔主を見失ひつれど、長櫃は恙なく彼所へ送届けぬとあるに、孫右衛門夫婦は驚き、こは奈何にぞとまどひ、俄に忠三郎親子を呼びて、かくと告しらすに、二人はこれ聞き心も空に嘆き、急ぎ彼所に行きて搜索とあるに、孫右衛門そは宜なり、我も俱に往かんと忠三郎を誘引つ、四五人の下僕を將て桃尾に到りぬ。この時はや天明の頃はひなれば、何方の隈も看えずといふことなれば、手わけして四方を探すに、窪かなる叢の裡より、貞輔が屍を索め

出だしぬ。忠三郎これを見て、且つ驚き且つ悲み、氣も消え心も失せて、深く嘆き悲しみけるに、孫右衛門も俱に哀れを催し、そゝる涙に袂を濡しつるが、斯ても果べきにあらねば、忠三郎をさまへにすかし慰め、貞輔が屍僕等に昇荷はし、家に送れば妻の道柴が嘆き、譬るに物なくありしかど、屍をいつまでも家に置くべきにあらねば、なぐく送葬しつ、跡念頃に弔ひけり。此ことはおき孫右衛門は貞輔が死したるにつけ、古の花がこといと氣遣はしく覺束なければ自ら帯解に行きて其體たらくを聞かんと、彼所に行き和尚寂巖に對面せんこといひ入るゝに、寺僧等昨夜の體たらくを物語り、寂巖今に歸り來すとあるにいと不審おどろき、急ぎ家に歸つて、妻の園花に斯と語れば、妻はこれを聞くより只狂氣せるものゝごとく、嘆きまどひしかば、此

事かくすとすれど叶はず、終に四方に聞え孫右衛門が思慮の浅きを誹  
謗けり。孫右衛門は今さら詮術なく、古の花がことを熟く想ふに、も  
し盜賊の所爲にや、また寂巖が奸計にやと、はじめて貞輔が諫を想ひ  
知り、後悔すれど及ばず、もしやと心まどひ、二人の下僕をつよく掬  
問ど、露ばかりも知らずと云ふに、素正なき事をしつるをもて、公  
に訴へ事を明白にせんによしなく、たゞ此うへは四方を搜索に不如と  
人々を頼み古の花が行衛を索めけり。こゝに京都三條なる飛脚屋忠平  
は、前年古主一色直兼が遺子を養ひてより、只願時節を伺ひ一色の家  
を興さすべく想ひしかど、其時を得で没命つれば、忠平が妻其兒をし  
て家を嗣し、忠兵衛と名乗らし、忠平が時にかはらず飛脚をうけがふ  
生營をなさし置きぬ。然るに貞輔横死の旨其告あるに、忠兵衛は我身

の上に深き縁故あるをば知らで、貞輔が子にてこの家に養ひ子に來つ  
とおもへば、深く嘆き悲しみ、急ぎ大和に來り、忠三郎親子に逢ふて  
ともに悔ひ嘆き、其仇を報はんすれど、何者の所爲とも辨へねば、  
只齒を切み胸を摩るのみにて、無念を堪へて過ぎにけり。そもく此  
忠兵衛が人となりは奈何にとなれば、容貌清く心正しく、才秀で此の  
勇氣ありて、弱きを助け強きを挫くをもて、人これを賞せり。されば  
今回、古の花が體たらくを聞き、我父附從居て、其行衛を失ひしは、  
冥府に於てもさぞ心苦しくおぼすらん。よりにまづ古の花が行衛を索  
め、これによりて尋ねば、自ら仇も知れ、父が鬱忿をも晴らめと想へ  
ど、今尙養母恙なきに、且つ古の花が面さへ看しらねば、空しく想を  
貯ふるのみにて打過れど、丈夫志徒にすべきにあらずと、私かに



さま／＼の術をめぐらし、其の行方を索めける、心のほどぞ健氣なり。  
然るに今年長祿二年、筑紫の大内政弘將軍家の召に應じて上京せり。  
此大内家の館は三條通にて、忠兵衛が家と程隔らざれば、久しきより  
立入り、萬の用を承負つれば、今回の上京にはわきて事繁く、此程は  
忠兵衛、此館にのみ居て口を送りぬ。こゝに大内家にて金銀を掌るも  
の、下司に、島谷八右衛門と云侍あり、こは累代の家臣にもあらね  
ど、利のことにおきては飽まで賢きをもて、今此下司とはなれり。さ  
れば此御館に出入するほどの商人は、八右衛門が意に應はざれば、  
利を得ることの薄きをもて、みな媚び諂ふにぞ、忠兵衛も生營の道な  
れば、彼が意に稱ふやうにぞなしにけり。そも此八右衛門は其性貪欲  
にして好色の人なりしかば、時々花街などに通へど飽まで吝嗇なれば

己が財をば費さで、主家に立入る商人を誘引て、これに揚代を償はし  
などすれど、人あへて厭はざるは、これ虎威をかる狐なりとは知らで  
擅に利を貪りぬ。近頃鳥原の花街に、梅川と云ふ遊君ありと人足を  
賞して彼は我國の小町、唐國の西施と云ふともやはか過ぐまじ。され  
ど奈何なる故にや、數多の客人絶間なけれど、誰にても實の逢瀬を遂  
げしものなきよしを、口順すに八右衛門これを聞き、好色もの、癖  
とて、梅川を看んと思ふ心頻りなれど、我財を費さんことを惜めば、  
思ふのみにて打過ぎけるに、此回忠兵衛が晝夜を辨ず館に居て親しか  
りしほどに、彼を誘引ばやと思ひ、一日閑暇の時を伺ひ、鳥原の遊君  
梅川を見んことを語らふに、忠兵衛も我生營のことを掌る人の勸むる  
に、且つは豫て古の花が行衛を索る心あれば、仔細なく承引、其日黃



古乃花双紙 (梅川忠兵衛)

昏より八右衛門と打連れだち、鳥原の花街に赴き、常に親しくする茶肆がもとに至り、まづ梅川がことを聞くに、實にも人の風聲するに違はず、ひく手あまたの客人はあれど、妹春のかたらひをなせし者なきと云ふに、八右衛門これを聞き、我も彼梅川が客人となりたらまじかは、同なじく物笑のかずに入らんも、腹ふくるゝ所爲なれ。さはあれ名高き名妓を看ざるも本意なしと、思ひ凝らしつるが、やをら心づきて忠兵衛に對ひ、我は今宵さる遊君を呼ばんと思ふに、名だゝる梅川の君を看ざるも此花街に來りし甲斐なし、足下は今宵彼君を呼び給へとあるに、忠兵衛再三辭みてこれを八右衛門に譲れど、さらに承引かて只願わが言に任せよと強ゆるに、忠兵衛今は辭むにところなく、其すゝむるに任せけり。かゝれば二人はうちつれて、彼娼館がもとに赴

きしに、折よく梅川に客人なかりしかば、こは幸なりとこれを忠兵衛に揚げさし、八右衛門は松山とかいふ遊君を揚ぐべきに定め、其出來るを待つに、程なく松山梅川の二人うち連立出づるを看るに、只是水と水晶のごとく、いづれも照かゝやくばかりなれど、梅川が容貌はわきて艶やかに看えけり。そのさま奈何となれば、霞の眉あしやかにして、柳の黒髪春風になびき、桃花の唇朝の露に霑ふ、少しく恥らひたるけはひは、春の夜の朧にかすむ月影に似て、正に月の宮人の天下り、龍の都の處女が、海ばらに泛出でしにか、と心地まどふばかりなるに、主の老嫗をはじめ多くの婢女了鬘等、酒と肴とを運び來つ酒宴を催せば、且妓女等出で來て今様平家など語り出して興を介くるにぞ、人とうち和らぎて幾杯の酒を傾けける。なかにも八右衛門十分

の酒氣をおびしかば、酔興に乗じ、梅川に迫り酒を勧むるに、梅川素より酒を嗜まざれば、深く辭めど些もゆるさず、強いて幾杯の酒を吞しけるほどに、いたく酔て其席にも堪へずおのが間に退きてうち仆れぬ。かくて其夜もいたく更たけしかば、いざや睡につき給へと、妓女をはじめ婢女了鬘等、八右衛門忠兵衛の二人を牽いて、各の間に誘引入れて暇を告げて去りにけり。忠兵衛は梅川が間にいざなはれて其裡の光景を看るに、主はいたく酒に酔ひ、しどけなき様にて熟睡しおるを看、心裡に想ふやう彼人に肌を觸れずと聞きつるが、扱は此如き術をもうけて客人を欺くにこそ、悪き女の行状かなと少しく怒の心を發せしかど、また想ひかへし嗚呼愚なり、我今此無禮を咎めば、好色無頼のものとや云はれん。と心を静め獨り衾の上に寝らんと側を看るに

ひとつの文卓の上さまさまの書どもを積みおけり。又其片邊には多くの書畫をおき散しありしかば、こは心にくきことかなと取りて看んとし、失ちて其側に撫牛の据えありしを轉し落しつるに、其腹の裡より一ひらの紙落ち散りしかば、慌忙これ修めんと手に取りて看れば、大和國帶解寺の、地藏尊の御影なればいと不審、此御佛は世に知られ給へど、多くは孕めるものならでは信じ奉らざるに、これを持つからは遊女の身ながら孕てるにぞあるらん、爾るに斯く正なき貌をして寝ぬるはよからぬことよとゆり起せば、此時梅川が酔少しく醒めたればうち驚き急に起かへりつ。忠兵衛を看ていと恥らひたる氣配にて云へりけるは、わらは不圖も酒を過し、はしたなき態を看參らせ多くの禮を失ひぬ。幸ひにみゆるし給へと詫びぬれば、忠兵衛否苦し

からし我その睡を驚かすべきにあらねど、只今過りて文卓の上なる撫牛をまろばせしに、其腹の裡より帯解の地藏尊の御影出でたり。こはこれ孕めるもの、信ずる御佛なるに、おことの持ち給ふは若し孕めることなどのおはしつるにか、さる身にしあらば正なき貌して寝ねんはよからじと、想ひはべれば夢をおどろかしまいらせしなり。さらに淫戯をせんとにはあらじと云ひ聞ふるに、梅川はその正しく忠やかなる志を感じ、ながし目にしてその人を看るに、色白く眼秀でて、玉のごとく清らかなる男子なれば心おどろき、これまで奈何なる搢紳家豪家の風流男を看れど、夢ばかりも情をば動かさざれど、忠兵衛が志と云ひ容といひ、世に少なりと想ひそめて、此人にこそ終身を任すべけれ。とそゝろに戀の情うごき、おどる胸をおししづめて回應ける

は、わらはが禮なきを咎めはし給はで、深く優恤給ふ御心ばへこそありがたけれ。今は賤しき遊女にはあれど、深き宿願のことはべれば、いまだ男子に肌を觸れしことなし、さる身にしあればなどて孕みさむろふべき。斯聞え申すともよも實とはし給ふまじけれど、神も佛も照覽給ふ露詐は申さじ、且帯解の御佛を信じ奉る事は深き緣故こそさむろふなり。こはみだりに人に知らすべきにあらねど、それなる撫牛は奴家が身の守護となりて、不思議靈驗ありしを君が手に觸れて腹に藏めし地藏尊の出給ひたること、是ふかき縁と覚えはべれば、奴家がごとき不束なるをも厭ひ給はずばと云さして、側近くより添ひはしつれど、さすがにはづる顔色は、紅葉に染むる色はかはらでと聞ゆるに、忠兵衛はうち驚きつ、この遊女、人に膚をふれずと聞きしに、な

ど斯は戯るゝぞと怪しめど、世に少なる艶女の情をこらし聞ゆるには、柳下恵も心を動かさし、羅漢も迷ふべく想ふなるに、まいてこれが客人なるをや。忽ち心ときめき、こは過世より契りしことよと憐れにおぼえて、終に新枕をかはすとすれば家鶏の、我しりがほに八聲を告ぐれば、程なく茶肆の主の迎ひに来つ、山本の神ならずとも晝ははかり給へなうち戯むるゝに、名残惜くも忠兵衛は歸らんとするを梅川ひきとやめ、彼撫牛を出し、こは甲夜にも聞えまゐらせし如く奴家が爲にはいみじき守なるを、君が手に觸れて深く信じ奉る地藏尊の現れ給ふこと正しく我夫にせよとの御告とおぼえはべりつれば、此年頃川竹の憂がなかに身を汚さやりしを、山の井の淺からぬ妹脊のかたらひをなしまいらせられたれば、常磐の松のかはらぬ夫婦と思へば、

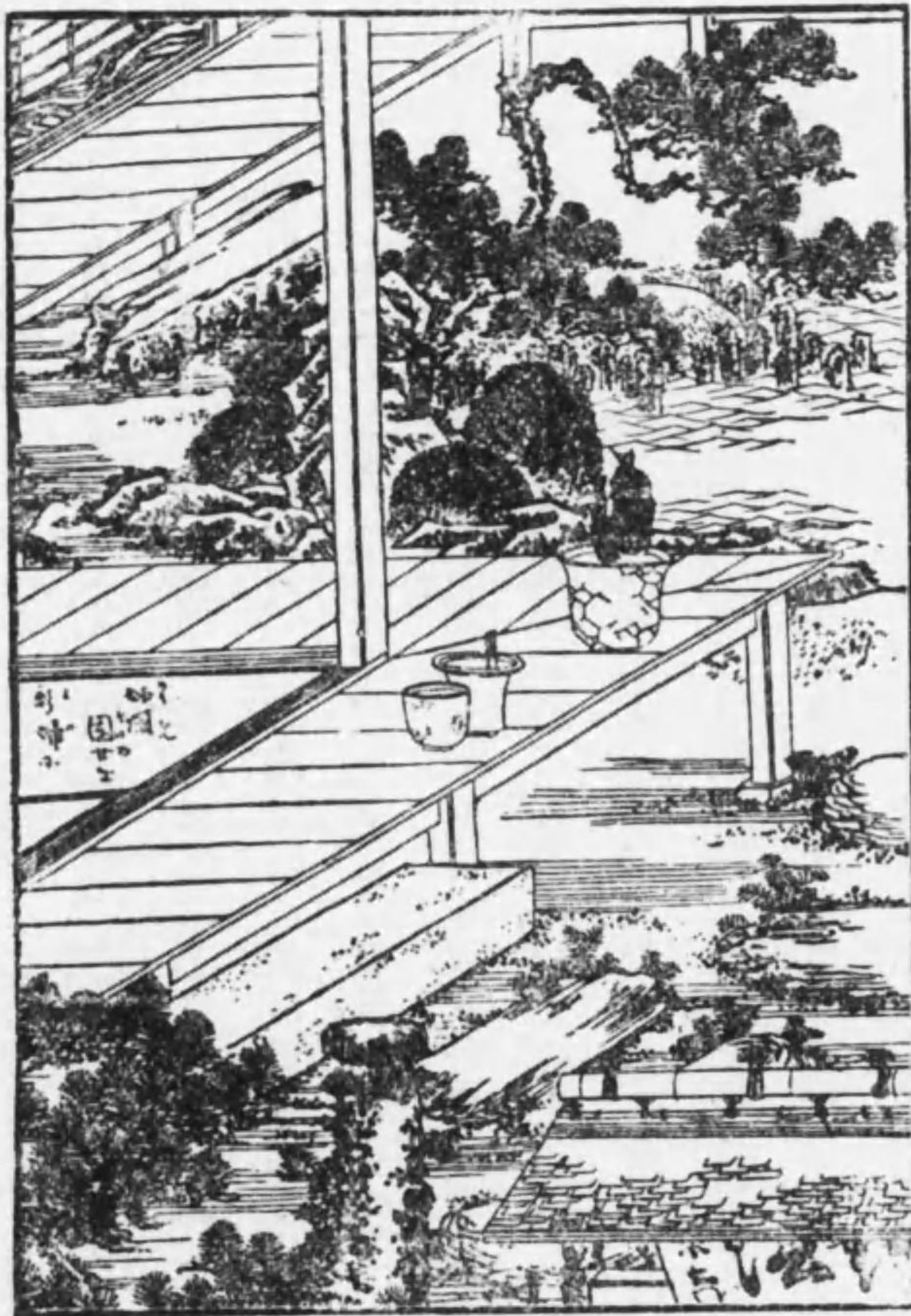
いまより君が側に居る心をもて、此牛をまいらすなりと與ふれば、忠兵衛も膚の守袋より何やらん一封を取出し、某も異妻を迎へぬしるしに、狎ひ親よりこは汝が身には二なきものなれば、生涯身を放さで守りともせよと給ひつるものなれど、只今御身にまいらすなり、これぞかたき誓なりと、梅川に授けまたのあふせを約しつゝ、八右衛門とうちつれて、我家にこそは歸りけり。

○忠兵衛梅川互に身の履歴を語る

斯て後忠兵衛は、梅川がせつなる志を愛で、時々島原の里に通ふに梅川も此人ならではと赤心を盡しけるほどに、互に思ひ思はれつ、深き間とはなりにけり。こゝに忠平が妻は夫に後れてのちは、家事をば狎子忠兵衛に委ね、その身は髪をおろし、名を妙閑とかへて佛の道に

入り、只願後世のいとなみの外他事なくてありしが、此程忠兵衛が體たらくを見るに、時々の島原通ひに、時としては深夜にも忍び出るをふかく愁ひ想へらく、此兒は亡夫の遺言給ふに、素故主一色どの、子なれば、奈何にもして故の武士にせよとありしに、今斯る身の行状をさし、若し過失あらば夫の志を無にするのみか、彼よしなき遊女などを妻ともせば、發達妨ともなるべし。今まで妻のことを議らざりしは、由緒ある人の女兒を娶さすべく想へばなり。然るに年もはや廿にもあまれば、獨寢のさびしきをかこち、かゝることをばするらめ、こはまた道理なり。今は窮猿林に投ずるときなれば、彼是を選まではやく妻をあらしむに不如と、密にこれを索むるに、其時即大阪天王寺の樂人に、進の何某と云ふものゝ女兒あり。父母にはやく後れ孤と

なりて、妙閑が由緒あるものゝかたに痕はれてありけるが、名を園女といひて今年十七にぞなりぬ。其容貌艶やかに心ざまさへやさしければ、これを迎へさせばやと、彼所に行きて其事を議るに仔細なく諾ひしかば、妙閑斜ならずよろこび、一日忠兵衛に對ひて云出でけるは、御身はや二十とせにもあまり給へば、疾く新婦の事を議るべきに、彼是の事にまぎれて其事なくて打過ぎしが、此程奴家が由緒あるものゝ方に一人の女兒あり、名を園女といひて容貌はかく心さまはしかなくなれば、これを迎へさしまいらさんと思ふなるが、おん身の心は如何におはすや、つゝまず云聞え給へ、其回答により速やかに事を議ひはべるべし。奴家も年たけて外に樂しきことなきに、はやく初孫をあらして老が心を慰さし給へと、餘儀なく聞ふるに忠兵衛は、梅川と深く





誓ひしことなれば、諾ふべき心はあらねど、素孝心ふかきものなるに殊に、親の由緒の人を妻にせよと云ふは、何と辭まんやうもあらねど、母の命に従へば梅川への義理たゞず、兎やせまじ角やせまじと心ひとつに想ひ悩みつ。しばし回應なかりしかば、妙閑再び云ふ是まで奴家が云ふことをば、露ほども垂ることなかりしに、只今云聞ふるをば一言のいらへだもせざるは、他に想ふ女のありて爾あるにや、もしさることあらば其女をむかへ給へ。しかはあれ筋もなく、氏もさだかならぬもの、女兒をば妻となし給ひぞ、こは老の顔にひがみて云ふにはあらし、行末おん身が爲に悪ければ、斯は云ふなりとあるに、忠兵衛はこれを聞き胸の苦しき何に比へんやうはなけれど、目前母の心に脊けるは孝にあらねば、後のことは兎まれ角まれ、親の命は乖かれじ

と、心をさだめて云出でけるは、某さうく他女を想ふことはべらじ、速に回應せざりしは、いまだ三十にも及ばで妻を迎へんと奈何あらんと想ふが故なり。いかで命を辭みはべらん、只御心のまに〜はからひ給はれとあるに、妙閑こよなく喜び、さな深く慮り給ひな、我子悪かれと思ふ親やあるべき、別に想ふ女もあらじとならば、少しもはやく彼園女と婚縁を遂げ給へと、これより俄に納采の準備しつ。吉日を卜び園女がもとに送りしかば、彼所にもかぎりなく歡び、近日うちに婚姻あるべしと、雙方の家内さゝめきて、只願其事のみに日を送りぬ。かゝりければ忠兵衛此事にさゝへられ、久しく梅川を問はでありしかど、心の裡にはあはれ此事をしらし、兎も角もせばやと想へど、母はさらなり奴婢の手まへもあれば、島原に行くこともならで、

只心をのみ惱しけり。此折から鳥谷八右衛門はこれまで、忠兵衛が鳥原へ行くをもておのれも行きけれど、此程絶えて其事なきに堪えずやありけめ、一日忠兵衛がもとにもう来て、密に彼所に行かんことをすゝむるに、渡に舟と歡びつ、母には大内家の御館にまかるよしを欺き慌忙しく八右衛門とうち連れて出行きぬ。かくて道を急ぐほどに、はやくも鳥原に至り、彼娼家がもとに行くに梅川は、近頃絶えて忠兵衛の來ざるを恨み、うちかこてる處なればこよなく喜び、互に恙なきを告げもし聞せもしつ、妓女了鬘等が退くを待つて、忠兵衛梅川にむかひて云へりけるは、偕此程絶えて問はざりしは、爾の事あるによりてなり。と母のはからひにより婚縁を整へんとする、首より尾に至るまで詳に聞え知らずに、梅川いたく腹だち、誓言に乖けるをせめてうち

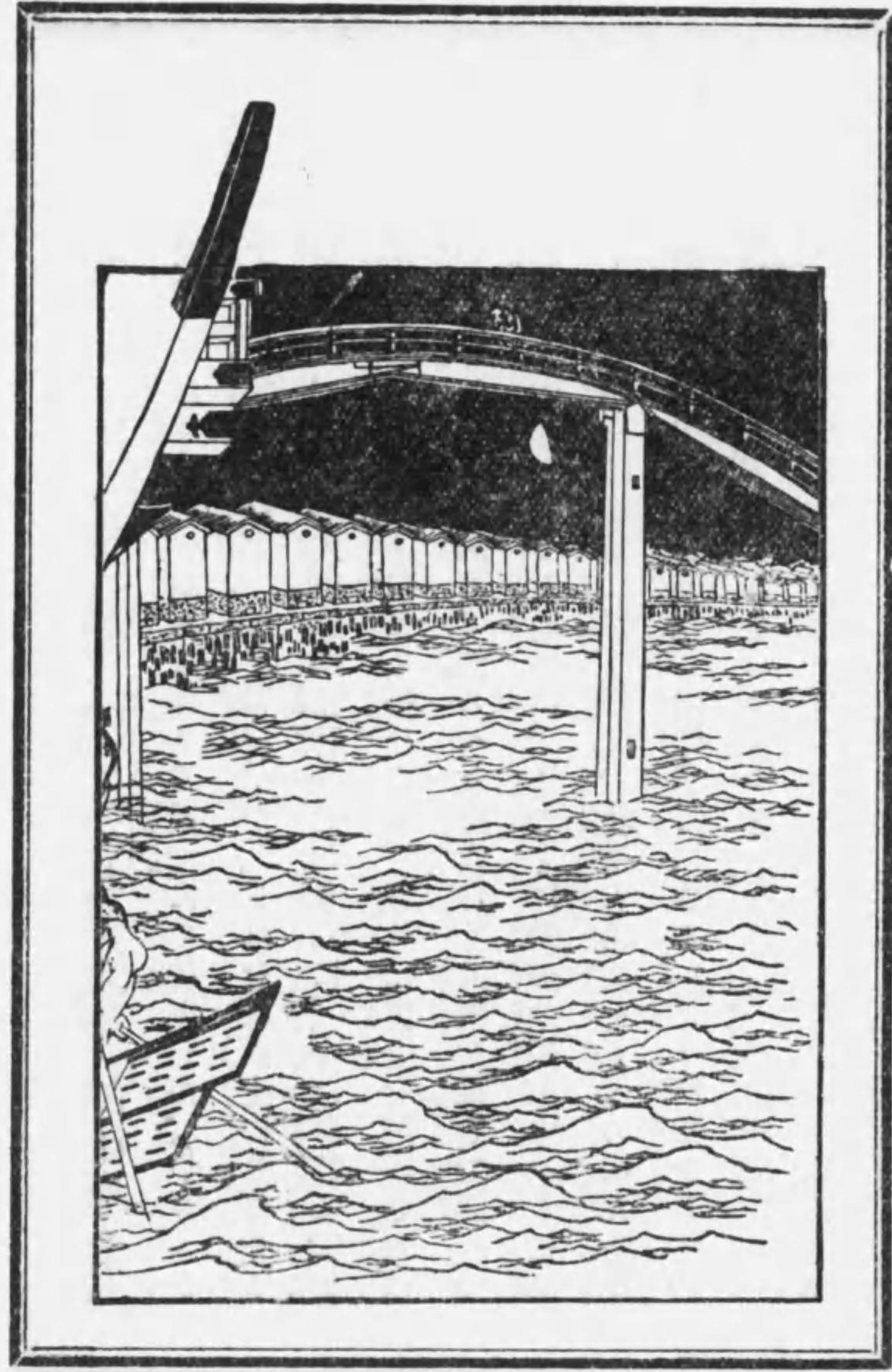
嘆けば、忠兵衛これを論して云ふ、我さらに其心なしといへど、此婚縁を承引たるは、素某ことは、大和國桃尾の邊にて、貞輔といひしもの、子なるを、今の家に頼なはれて、子となり居れば義理ある親の命なれば、其所にては辭みがたく、諾ひはしつれど夢ばかりも、園女を迎へる心はなく、はやくおん身に告げて、ともかくもせんと、さてこそ告げはべりぬ。心をさだめて回答給へ、我も覺悟はしつるに。と云ふに梅川驚きて、さては貞輔が實の子にておはしけるにか、奴家が親は桃井孫右衛門にて侍るぞやと、云ひさしてあとは涙にくれ居たる。忠兵衛これを聞くよりも且つ驚き且つ喜び、俄に梅川を上座にすゝめ居らし、兩手をつかへて云へりけるは、宣はすを承はれば、正しく古乃花君にておはしけるに、知らぬことゝて多くの禮を失ふのみか、妹脊

のかたらしひをなしまわらすと、無禮不義の罪遁るゝに所なし。想ひ出せば三年前、孫右衛門どの地藏尊の夢想により、御身を帯解へ遣り給ふとて、父貞輔に道の守護をなさし給ひつるに、不料も道にして何者にか害せられ居るにぞ、無念やるかたなくはあれど、仇のしれねば詮術なく、只切齒咬牙、怒の涙に袂を霑すばかりなるに、剩へおん身帯解へは行き給はで、去向なくなり給ひぬと、聞えて孫右衛門どの御夫婦の御嘆き、たとふるに物なく熟く想へば、貞輔害せられば此罪なきに似たれど、つきそひ居ながら如此に及ぶこと、その越度なきにしもあらねば、御去向を搜索まゐらせ、父が罪を贖ひ、御夫婦の御心を易からしめんと、さまざまに心を盡せる甲斐なく、今日に至るまで御行衛を索めかねしに、思ひきや此花街におはすべしとは、神ならぬ

身のしらで過しぞ淺猿けれ。此上はとくく誘引まゐらせて、御親子どの御對面をなさしめまわらすべし。されば今までは御身のほどをしらで、妹脊のかたらひをなしまわらせしは悔ゆとも詮なし、此事をばたゞ夢とばしおぼしあきらめ、某がことをばふつに想ひとゞまり給へとあるに、梅川は父母に對面するは歡びなれど、さりともと思ふ人に別るゝを深くかなしみ、はふりおつる涙を止めかね、少刻回答なくありしが、やゝありて云出でけるは、我かたざまの人ともしらで、今日に至るまで奴家が身のほどを明しまわらさぬこそ鈍けれ、おん身の仇を知らしまわらせんに、奴家が云へることをも聞きわきて給へ。そも御身の仇と云ふは、今宣はすごとく、三年前地藏尊の夢想にまかせ父うへ奴家を長櫃に入れ、密に帯解へ送り給ふ道にて山賊丑太と云も

の長櫃を見てよき財寶なりと想ひ、貞輔を闇討にし、蓋をひらき看るに奴家忍び居たれば案に相違し、其望を失へど、做すべき所爲にやありけめ、奴家を捉へ去らんとして、其所に臥居たる牛に蹶しかば、牛は腹だち角もて丑太をかけんとせるを、奈何にしてか彼牛をば長櫃の裏へおし入れ、故のごとく蓋をしつ、奴家をひきたて走るにぞ、こは如何なる目にかあふやらん、よしや死すとも盗人の爲に、辱しめはうけじものをと覺悟しつ、只顧地藏尊を念じ、丑太に引かれ行ほどに、山ふかき所に至りぬ。こゝに一軒の草屋あり、裡には多くの盗人集居たりしが、丑太を看て棟梁の歸り來給へりとして出迎ふに、悠々と裡に入りつ奴家をば奥まりたる處に誘ひ入れ、暫時憩はし、偕云ふやう、深く心を煩はし給ひぞ、我は丑太といひて此邊の山賊の大將なり。年

は六十に餘る翁なれば、そこを犯し恥しめんとて誘引來しにはあらず、されど故なくては連來じ。翁も故はさる武士にて侍りしが、いさゝかの事により今斯零落たれど、一人の男兒あり、これをば武士にせばやと前年手便を得て、筑紫の大内家に仕官させおきしに、今は發達て、彼國にては重き奉行の下司となりて勢ひあり。されば良妻を迎へさせばやと、久しく想ひ貯へしかど、然るべき處女なく其事を果さで過ぎつるに、今夜その體たらくを看るに、まことに翁が新婦とすべきに堪へたり。よりて明日は筑紫に伴ひ行て、我子と婚縁をとゝのへんと思へり、此事いかに諾のふべきや。と聞ふるに、さる正なき所爲をして、父母の名を下さんこと夢あるべからずと想へば、一言の回應をもせでありしが、其夜は強ちにいはで歎みけるに、明日になりて再び其事



を云へど、さらに肯はざれば、丑太ふかく腹立ち、かばかりことをわきて頼み聞ふなれば、たとへ木石にて作れる人にもあれ、などて諾はであるべき。さほ難面心ならば、我に做すべき事こそあれと、いきまきつ、一條の繩をもて、つよく縛しめ、猿轡をはめ、山駕籠におし入れ、二人の賊に昇荷はし、其所を立出づるに、奴家は駕籠の裡に泣伏して、今ははや命のきはと想ふに、或は高きに上り、且は低きに下り、たゆみなく行くに、其夜のうち難波に出でぬ。こゝにて西國方より來るといふ、岡戸に賣りわたされ、夫より船に乗せられ、安藝國嚴島に渡り、角文字の長といふ娼家に鳥目五拾貫文に賣られぬ。此地方は海路のよせよく、賈舶商船多く此浦に碇をおろし、風の便を待つことなれば、いと賑ふなるに、且青樓軒をならべ、街の柳のまねきによ

りくる旅客少なからで、歸るを忘るゝ少年も多かりき。此角文字の長と聞えしは、家居もつぎつぎしく清らかなれば、國の守の下司をはじめ、いまだ祿も定まらぬ人は更なり、やごとなき指紳家も、みなこの長がもとに競ひ來れば、都におとらぬ遊君も數多ありけり。奴家丑太の爲に岡戸にうられ、こゝに來ること、龍譚を遁れ、虎の穴に陥りし心地しつ。とても生くべしと想はねば、晝夜衣ひき被ひで泣きくらし、寔に照君の胡地に嫁ぎ、貴妃の馬鬼に害はれんとせるも斯やと思はるゝに、多くの遊君等奴家を諫めけるは、おん身今かくなり給ふも、みな前世よりの因縁ならめ、なかゝに嘆き給ふは詮なき所爲なり。我も素より遊女とは生れ來ざれど、或は親兄弟の爲、或はあかぬ夫を助けんとし、且は岡戸に勾引されこゝに賣渡されたるもはべるなり。

浮川竹の流れにも朝夕になるれば、また思ひ慰むかたもあり、日毎にかはる波枕も、ふつにむくつけき人のみもなく、思ひよる湊のなきにしもあらず、苦しきなかにも樂しきこともはべるなり。と只願にす、むれど、豫て覺悟をしつれば、いや／＼回答もせず今日や死なん明日や命を縮めんと、ちやに心を碎けども、守人の多く、甲斐なき命を存命に、主の長これを猜し、逆もこゝに在して益なしと、再び此地方に賣りわたされしに、奴家が體たらくを云ひやおくりけめ、守ること嚴なれば死すべきやうもあらぬに、此家の長は是非を云聞さずして、強て客人を迎へさしぬ。こは皆な我身のうへなり。おん身の仇は彼盜賊丑太なり。彼が子といひしは大内家にて、島谷八右衛門といへる由を聞きぬとあるに、忠兵衛且つ喜び且つ驚き、此年來知られざりし仇

を知ることに偏へに御身の覆庇によれり。今聞え給ふ島谷八右衛門といふは、某と俱に來つる松山の客人にてはべりぬ、斯るうへは弟忠三郎にも告げしらし、天を俱にせざるの誓を討ち、父が修羅の苦患を助けんするに、其山賊丑太はいづくに居て、形容は奈何候やらん、委しく問かし給へと問へば、梅川回答けるは奴家彼が幽棲に行きながら、只恐ろしきに其所を知らざるは鈍けれど、少しは辨へたることも候なり、はじめ捉へられし所より行くこと數丁にして、大きやかなる瀧あり、其所を過ぎて山賊が家に至りしに、其所にてはその瀧遙にひくき方に聞きはべりぬ。賊の顔ばせは松山の客人によく似て、彼人の年老たるなりと語れば、忠兵衛少刻考へ、仇のさまは心得つ、其住所は布留山にやあるらめ、かゝるうへは少しもたゆとふべきにあらず、明日は

疾く大和に赴き、孫右衛門どのに遭ひまゐらせ、今夜の體たらくを聞え、忠三郎を供して布留山にわけのぼり、丑太を討つて父が仇を報はんと勇みだちて喜ばば、梅川も共に喜びて云へりけるは、只今も聞え申すごとく、仇の去向を告げまゐらせし報ひには、奴家は願事も叶へてたびねとあるに、忠兵衛この恩を蒙るからに、何まれ否み申すべき。とく聞かし給へと回應すれば、梅川いと恥らひたる面持し、おん身奴家が身の上を聞き給ひて、妹春のかたらひは今夜かぎりと聞え給ふなるが、そは餘りに情なき所爲なり。豫て誓ひし如くおん身の外世に夫と看るものなく、川竹の身にありながら、仇人に身を汚さじとする心の苦しさを、不便と思し、かはらぬ夫婦の契こそあらまほし。もしさることの叶はずば、たとへ父母にまみゆとも、などか心の樂しか

るべきと、想ひこふて云聞ゆるに、忠兵衛は今さら何とわくかたなし、只一言の回答もせで、少刻思案にくれ居たる。

○孝を全ふせんとして却つて不孝の罪を作る

這時梅川は忠兵衛が言語なきをうち恨み、しか回答し給はぬは、園女主の増花に心をうつし、奴家にははや秋風たちて誓言を忘れ給ひつるにや、さる御心ばへになり給は、存命て憂を看んより命を縮めんにしかじと覺悟のていに、忠兵衛ながき息をつき、左程までに思ふ志を、などか空しうなしはべらん。此うへは明日にもあれ、園女を迎ふとも、添臥をせであるならば、彼怪しみて自ら去るべし。其時を待つておん身を迎へんに、必ず短氣ばしし給ひそとこれを止め、又云ふやう、渾て今夜のこと八右衛門に漏聞えば、事を誤るのみか、如何



なる禍の出來んも知るべからず。されば孫右衛門どのと、おん身との對面をなさしまゐらすも憚れば、まづ暫しが間これまでのごとくに、しらす顔して此處におはせよ、しかれども御身のほどを知るうへは、此後他人に看しらすも心苦しければ、疾く身請しまゐらすべく想ふなり。されど、母妙閑の想はん處も如何なるに、また身價の黄金も整はず、今こゝに大内家より預り置ける黄金百五十兩あり、これをもて手附とし、明日より客人を迎ふることをやめさすべしとあるに、梅川かぎりなく喜び、しかおぼすからは、これに過ぎたる歡はしきことやばべらん、さはあれ奴家が爲に、人よりあづかり給ふ金を失ひ給はんこと心よからじ、御心ばへだにかはらせ給はずば、たとへ火水の中に居るとも、など堪へすと云ふことやあらん、其黄金をば届くべき方

に送り給ひね。と諫むれど忠兵衛頭をうち振り、こは心を煉はず金にはあらじ、と更に承引かで俄に主を呼び、密に梅川が身請のことを議るに、主は梅川が今は其容色のよきをもて客人を迎ゆれど、下紐を解くの契りなければ、終には衰へて詮なきものとならんと、かねて心苦しく想ひしに、今忠兵衛身請せんと云ふを聞き、こはよき幸と喜び、なか／＼に多く利を得んとして此機會を失ふは愚なる所爲なりと思量し、三百金にて與へんと回應すれば、忠兵衛は想設けしよりは身價賤しければ心を易ふし、そは心得たれど今俄には整へがたし、こゝに其半の金あり、まづこれを取置き給へ。残れる金は、今日より二旬のうちにはきと調達すべきほどに、明日より梅川をして仇人をむかへさし給ふなど、懷より百五十兩の金を出して與ゆれば、主は不圖金



を得て満面生春色、命いかで乖きはべらん、又宣ふことをも違はし給ひぞ、二句を過ぎば残れる金を賜りねと、いひつゝ一枚の領状を書いて與ゆれば、忠兵衛これをおさめて云へりけるは、今夜のこと他に聞えては妨あり、事の整はんまではかまへて漏し給ひなとあるに、主は心を得候ひぬと金を懐にして出取りぬ。これよりさき八右衛門は、おのがあげし松山は親しき客人の來ぬと臥所を出行きしが、再び歸り來ざればいと寂寥に堪へず、忠兵衛と物語せばやと此處に來かゝりしが、何事やらんふたりしめやかにさゝやく聲の聞ゆれば、有紫にさしつけて入らんも心なしと、屏風の蔭に潛み聞くに、或は恨み或は嘆く間に其言葉はさだかならねど、丑太と云ふことの聞えしかば、こは不審と思ふに、程なく主を呼びて、梅川を身請する商議するにぞいよ

く怪しみ、尋常の身請するとは異なり、是必ず故あらん、只今彼百五十兩の金を與ゆることも心を得ね、この金は必ず我家より預け給へる金ならめ、何まれ其實否をたゞさんと、想ふにはや夜もあけなんとすれば、今はその事を明めんによしなれば、歸つて后知るべき様子あらめと、さあらぬさまにて聲をあげ、やよ如何に忠兵衛、襄王の夢もはや醒むるときなり、また重ねても見參に桑中の樂をしたまへと、戯るゝに忠兵衛うち愕き慌忙しく寢所を立出で、某いたく酒に酔て臥したれば、斯く殿を煩はしぬ、此罪みゆるし給へ。いざ疾くまかりはべらんと云ふに、梅川はまだ云聞ゆべきことあれば、引き止めんとするを、早くも猜し、目をもてこれを戒め、八右衛門とうちつれだち我家をさして還りけり。斯て忠兵衛は我屋に歸り、熟く想ひめぐ

らすに、實の父が仇を知り、且つ梅川が身の上をさへ知れば、少刻もうち捨て置くべきにあらねど、おのれ此家の嗣子となりし身をもて、擅に實父の讐を報はんとして、もし誤て返討にもなるならば、忽ち義理ある養母を路頭に迷はし、不孝不覺の罪人とならんも心苦しけれど、また天をも俱にせざるの讐を知りながら、その儘に置かんは心に忍びず、兎やせまじ角やせまじと、さまざまに心を惱しけるが、二つながら全きを得るの道を得ざれば、此上はまづ仇敵丑太が棲家を捜し明らめ、弟忠三郎に討すを名とし、我助太刀と稱して討んにはふかき誹は受けざらめと心を決めしかば、はやく忠三郎に告知らさばやと想へど、近日には園女を迎へん儲けとて、何くれとなく事繁ければ、心なく大和に行かんとも云出でがたく、とさまかうさま想ひ廻らしつるが

きと一つの謀をもうけ出し、母妙閑に對ひて云へりけるは、昨日大内家より奈良の布を買ひて、筑紫に下せよとあつらへ給へば、昨日は奈良にまかり候なり。彼所よりは程も近ければ、忠三郎がもとに立寄り、這回妻を迎へん事を告知らさばやとあるに、妙閑うち聞き我もとくさ想へど事に取り紛れていまだ彼處に告げざりき。そはよき序なれば、立寄りてよく聞えてよとあるに、忠兵衛すましぬと喜び、よきほどに回應し、其翌の朝まだきに家を立出でしが、ふりかへりて頓首し、某實に奈良へ行くには非ず、實父の仇を尋ねんとてまかるなり、欺きまゐらせしをばゆるさせ給へ。と心の裡に深く詫びつゝ、桃尾さして急ぎけり。頃は睦月のはじめにて、朔風肌を刺すがごとく、手足凍へて進みがたきに、ことに布留山の高低なる坂路に、雪さへ降りて氷

りたれば、聞くならく異國にありといふなる氷の山も、かくやとばかり想はれて、たどるく辛うじて、漸く布留の瀧を過ぎて、遙なる山上に至りぬ。この時日既に暮れにければ、ほどく尋ねかねたりしに、幽に火の光の看えしかば、こはその家にかと、火の影をしるべにしつ、たどり行き密に裡の光景を伺ふに、仁王などを作り損じたるがごとき大漢、三四人まとひして酒酌みかはし居たり。忠兵衛これを看、さては此處こそ丑太が幽棲ならめと想ひしかば、直ちに家裡に入らんとせしが、又思ふやう、彼們は緑林の徒なれば、謀なくば、丑太が身のほどを問ひ明むることはおき、なかくに奈何なる禍に遭はんもしるべからずと、少刻思案しつ、獨點頭き其門を叩いて案内を乞ふに、裡より回答して、今此に来つるものは誰そと咎むれば、忠兵衛これは都

のものなるが、此地方にて丑太の主と云ふを尋ねんとてまかり候なり。もし知り給は、願はくば教へ給はれとあるに、大漢等うら驚き何やらんさ、やさけるが、やがて一人立出て此裡へ入りねと請じ入れて云ふ。尋ね給ふ丑太の主と云へるは、則ち此家主なれど、用の事ありて筑紫にまかり給ひて今はおはさじ、足下は都にて何等の人なれば、丑太の主を尋ね給ふにや、忠兵衛うち聞き、僕は内家にて、鳥谷八右衛門と云へる人に頼まれまゐりたるが、見參にて聞えまゐらすべきことありしに、在さずと聞いて本意なし。さてしも何時のころ歸り給はんを知り給はずやと問ふに、漢子等また驚き、足下は八右衛門主の使にておはしけるにや、爾らば丑太どの、事はよく知り給ひけめ、いつもの生業の爲に行き給ひたれば、いつ歸り給はんや其期は知れ難し。我々に

聞え置きても苦しからずば、云知らし給へ。忠兵衛回應けるは、こは別のことにもはべらじ、今回黄金の入るべきことあれば、其黄金を送り給はれとの事なりとあるに、漢子等うち笑ひ、そは棟梁のおはさずしては、木に縁りて魚を求むるに均しく、我々が力の及ぶべきにあらじ還り給は、告げまわらせんと云ふに、忠兵衛尙其委しきをしらんと、其夜は其所に宿りを乞ひ、丑太が年齢容貌を聞くに、梅川が云ひしに露違はざれば、心の裡飛立つばかりに想へど、筑紫の果に行きて未だ歸り來ずといふに詮術なく、其翌朝彼所を辭し、それより故郷に赴き、母道芝、弟忠三郎に對面し、今度園女を迎ゆる首尾を委しう告知らしければ、母も弟も喜ぶことかざりなし。忠兵衛は其隙を伺ひ、忠三郎を密かなる處へ招き、父の仇且つ古の花が行衛を知ること、また昨夜

布留山に行きたるに至るまで詳に物語り、丑太が筑紫より歸り來るを待ちて、二人力を合せて仇を討つべき術を商議し、忠三郎は此後布留山のおとづれを窺ふべしと示し合せ、さて此事成就までは孫右衛門との夫婦をはじめ、母人にも漏すべからずとあるに、忠三郎不審、孫右衛門どの夫婦に、古の花主のことを告げざることは、その去向を知りながら其儘に置かんは義に於てなしがたく、早く身請すれば、忽ち仇の方へ漏れて妨あらんと、思ひ給ふてのことなるべければ、宜なり仇を討つことを、母人に告げ給はざる事はいかなる道理ぞと云へば、忠兵衛うち點頭きつ、その云ふ如く、孫右衛門どのに云聞えざるは爾り、母人に告げざることは、母人いかに賢くおはすとも、素女性のことなれば主の女兒を花街に置かんは心苦しくおぼし、如何なる事を宣

はずも知るべからず、然るときは親の命の乖しがたく、仇を報ゆに妨  
にならんもはかられぬ。纒の間告げまゐらさる不孝は、功を全ふせ  
しをもて償はんするに、よく忍び候へと説諭せば、忠三郎や、心を  
得たりけん、終にその道理に服しけり。不在話下却説忠兵衛が生營と  
云ふは、只飛脚をうけあふのみにあらず、千里を隔てたる地方といへ  
ど東間に往返して、自由を足すなれば、常に陸奥の黄金を筑紫に送り、  
對馬の白銀を吾妻にやるに、些の滞ることなく、翼ありて天を翔る  
がごとし。されば人の出入る事隙なく、其騒がしきは鼎の沸くに均し  
くぞありけれ。此頃主忠兵衛大和に往て家に居らざれば、店管彦六  
なるもの萬の事を關り、それづくに指揮せり。こゝに島谷八右衛門と  
云ふは、前に梅川が忠兵衛へ物語せるごとく、強盜丑太が男兒なりし

に、時を得て大内家に仕へ、今は人並にもなりにけり。然るに去ぬる頃  
忠兵衛と梅川とが物語を立聞せしに、正しく父の噂するとおもへば心  
裡ふかく怪むに、且忠兵衛密かに、梅川を身請せんと、百五十塊の金  
を娼家の主に與へしを看たりしかば、ますます不審、いかにもして  
其實否を糺さんと思ふに、主家より忠兵衛へ奈良布を買ひて本國に下  
せよとて與へし黄金の數と、娼家に與へし金の數と均しければ、この  
事よりして糺さば知ることあるべしと、忠兵衛が留守とも知らで下僕  
一人を召供しつ、忠兵衛がもとに來り、主はおるやと尋問へば、管店  
彦六回應けるは、主忠兵衛は御館より。奈色布を買ひて筑紫に下せ  
よと命を承りぬとて、彼所に參り候なるが、いまだ還り來ずとある  
に、八右衛門これを聞いて思ひ廻すに、奈良布のことをあつらへしは

廿日ばかりも前のことなるに、只今になりてゆくこと何まれ怪しきこととなり。實に奈良に行きしか、また高原に行きしをかく偽り云ふにや、奈良布を買ふこと急ぐことにあらねば、これやめて金をとらんとはい、彼其金を失はゞゆきづまりて我にわびんは必定なり。其時少しく謀を施さば、前に彼等が我父の噂せし、縁故を知るべしと、いと不審たる面持し、其事は去ぬる頃我殿の命を承り、忠兵衛はきとあつらへ置きたれば、はや疾く筑紫へ送り届けたることよと想ひしに、何故さは遅りつるぞ、今の程彼國へ下すとも、六日の菖蒲にて物の用にならねばやるに及ばじ、此上は其料に預け置いたる黄金を速に返し與ふべし、忠兵衛が等閑より我々が越度になれり、此事屹と糺さではやまじ。といきまきて云ふに、彦六大きにおどろき、某等は委しき縁故を

しらねば、何とも分疏べきやうなし、主忠兵衛今日か明日のうちは極めて歸り候はんするに、それ迄のうちを少刻待せたびねと詫ぶるにぞ、八右衛門も今彼是といふとも詮なければ、澁々ながら諾ひつ、別れてこそは歸りけり。此時母妙閑は、八右衛門があらゝかに云ふ聲を漏れ聞き、何事やらんと物の隙より窺ふに、我子忠兵衛大内家の命を怠り、奈良布を買ふ期を過せりと聞いていと心を煩はし、管店彦六を密かなる處へ招き、只今八右衛門の云ふを聞くに、其事實ならば多くの費をなすのみか、此後大内家の用を聞くこともならずなりなん。忠兵衛に於てはさる事はせざるものなりきに、近頃高原がよひすなれば、里の金には巨萬の富も盡くると聞くに、こは必らず花街にはこびつるにや、よしなき所爲をして、後の患を做すにこそ。とうち嘆けば、



彦六これを諫めて云ふ、これには定めて縁故のはべらん、ふかく心を  
惱し給ひぞ、あながち八右衛門どの、云ひ給ふやうにもあるまじと云  
慰むるに、妙閑は少し心をおちゐて、我子の歸りを待詫びぬ。さてし  
も忠兵衛は、弟忠三郎と仇を討つべき事を示し合せ、其歸るさ奈良へ行  
くべきにはあれど、布を買ふ料は梅川が身を價ふ開手に與へつ、外に  
貯へし金のあらねば、奈良へはゆかて手を空しうして歸り來つ。家近  
くなりて不圖も、八右衛門に行遭しかば、忠兵衛は腰を屈めて慇懃に  
寒暖をのべ、其恙なきを壽けば、八右衛門これらをばよきほどに待遇、  
さて云出でけるは、こは幸の處にて遭ひぬ、豫てあつらへー奈良布、  
とくに筑紫へ下しけることと想ひしに、今に彼處へ送り届けざるよし、  
只今彦六が物語にて聞けり。汝何の故をもて斯く延引に及びつるぞ、

今より彼所に下すとも、其期に後れぬれば何の用をかせん、此事我汝  
に云附ざるに似て長官にいひわくかたなし。我越度なき證に前にあた  
へ置きける黄金を返し與ふべしと、常に變りたる顔色にて云聞えしか  
ば、忠兵衛大いに驚き命畏り候、されど此事はさまで急がし給ふと  
も命給はぬゆゑに、此程までうち置きにけれど、餘りに遅りてはとお  
もひ、昨日奈良へまゐり候へるが、今は時はやく佳布少なれば一時に  
は調へがたしと云へりし程に、早く取集めて來せよと、開手を取らせ  
歸りはべれば、今はいかに宣ふとも詮すべなし、前に用ひ給ふ期を命  
給は、かく齟齬たることは候まじものをと偽り云へば、八右衛門此  
道理にゆきづまりしかど、素より邪智ふかく我意つよきものなれば、  
忽ち大喝一聲し、やよ忠兵衛いかなれば偽を構へて我を欺くぞ、今布

の一時に調へがたしとあるならば、などてその事を我に聞えずして、ひとり擅にはからへるぞ、想ふに汝此程島原がよひに多くの金を費すと聞けば、必ず金をば花街に取られ、布をば求めざるなるべし。汝が云ふ處實ならば布屋より取りたる金の要券あるべし、いでそれを看すべしと焦燥てば、忠兵衛今は陳ずるに處なく、回應せずしてさし俯き居るに、八右衛門欺笑ひ、たとへ蘇張が辯ありとも、いかで欺くことを得べき、よし／＼此上は汝を縛め市正にわたし、其實否を糺すべしとひしめくに、忠兵衛兩手をつかへ頓首して云へりけるは、今は何にかつとみはべらん、御猜察のごとく、豫て給へる金にて布をば買はず、島原の妓をあげて、一錢を殘さず遣ひ果しつれば、實に重き罪人なり、いかにからはせ給ふとも露恨み奉るべきにあらず。斯くいへば分疏

するに似たれど、此金を失ひしは、實にやむことなきことありてなり。それまで親しくなしまわらせられたれば、某が心をもしろしめさんに、よく察し給ひて憐ませたびねと、涙さしぐますに八右衛門、此體たらくを見その時を失ふべからずと想ひ、急に聲を和らげ、汝さばかり嘆きて憐みを乞ふなるを、など難面はなすべきや、その縁故は奈何なることぞ、事實を明白に云ひ聞えは、また做すべき所爲もあるべし。とあるに忠兵衛これを聞き心裡に想へらく、こは實事を告げばそのかたがまの人なれば妨となるべし、然れどもなにとも云はでは今の難を免るゝこと能ふまじ。こはいかに欺かんと、兎さま角さま思惟らしけるが、きと一つの謀をもうけ出して云出でけるは某事は知ろしめすごとく、龜屋が家を嗣んと養子になりぬ。然るに實の妹の一人はべりゐるが、



幼時勾引されて去向しらでありしに、何ぞはかるべき梅川は某妹にてはべりぬ。前に不圖彼に環會たれば、奈何にもして川竹の憂を助けんと、千々に心を砕けども、三百金を價はざれば花街を出すこと能はず、こは龜屋が家にては難しとせざれど、養ひ母の手まへをかぬれば、俄には整へ難しと躊躇うち、陸奥人の梅川を身請すると云ふに、漸く環會たる妹を遠くしらぬ國へやること心にあらねば、兎やせまじ角やせまじと心を惱す折から、布を買ひて納めよと其料を給ひたれば、是幸と後の事をば願もせず、梅川を價ひうべき手開に與へしほどに、陸奥にやることをばやましつるなり。近きうちには某が親里より、三百金を贈りこすべきに約し置きつれば、それまでを待せ給へと實しやかに欺けば、さすがの八兵衛門これを聞いて實ぞと思ひ、尙おのれが

父丑天が噂せしは、何事やらん聞まほしく想へば、恩をみせて問はんと心をさだめ、そは奇特のことにこそ、さる縁故ならば金を返すことを待つべし。さはあれ是までのごとく久しくはなし難し、勉めて怠りぞと、想ひの外に憐みたる回應するに、忠兵衛不審りながら厚く禮をのべ、既に別れんとする折から、母妙閑、忠兵衛が歸りのおそきに心を惱したどくとして此處に來かゝり、此光景を見てこよなく喜び、老の心せかくしく他に言語はなく、前に八右衛門が云ひたることを云ひ聞え、もし此事によりて大内家に立入ることを止められれば、世の聞えも悪しし、疾く金を返し奉りて其罪を詫びまゐらせよ、何まれまづ八右衛門公を家に誘ひ申せとあるに、詮方なく、八右衛門を誘ひ我屋に歸れば、母は只顧金をば返し奉んに、忠兵衛が等閑の罪を免さ

せ給へ。と詫びつゝ、疾く金を返しまゐらすべしと、我子を切に責むるに、忠兵衛返すべき金はなけれど、母の言語の乖しがたく、物なき懐に手をさし入れしに、梅川と取りかはしたる撫牛を、肌身放さず持居りしが、其牛の腹の裡に、土もて百兩の金の形を作れるを入れ置きしに、はからずその塊の轉び出たりしかは、こは撫牛の覆庇よと感喜しつゝ、それを八右衛門が前に置き、只今も聞え申す如く五十兩の金は、奈良の布屋に取らせれば取り戻して一時にまゐらすべきにはあれど、母の心を易からず爲、まづこの百金を返し奉るなれば、請取らせ給へと、目をもて其心をしらすに、八右衛門も目をもてうなづきて、老人の何くれと心を煩はすなれば、まづ此金を受納むべしと彼金を懐にしつゝ、跡の金を納むるときに、その請取の要券をば返すべし、と云果て別れを告げて立歸りぬ。

卷之三

○靈牛靈を現して二人を濟ふ

忠兵衛は母を欺き、八右衛門に怪しき金を與へ、其場を過せしこと心にはあらねど、仇を討つまでの謀なればとこれを忍び、只願忠三郎が音信を待てど、何事をも云來さるに、梅川が身を贖はんと、約したる日も近くあるさへに、八右衛門がもとよりは前の金を戻せよと、催促と頻りなれば、是彼のこと心に心を惱すに、且母妙閑は老の心のせわしくて、園女を迎へん事を急したつれば、忠兵衛は奈何とも詮術なく、千々に心を碎く折から、梅川がもとより俄に見參して、聞えまゐらさでは叶はぬことあるよしを云來しつれば、甚心もとなく密に島原

に赴き、梅川を相見て、まづ我此ほどの物憂ことを告聞ゆるに、梅川其辛苦のほどを云慰め、さて云出でけるは、近頃八右衛門松山がもとに通ふこと繁く、其度毎に奴家を招き、多方の物語する折、兎角に我身の上やおん身のことを問ひ、且丑太と云へるものを知れりやなど、只願聞かんことを想ふは我々が身の上を知り、丑太に内通せんが爲なるべし。それさへあるに身請の日限も纔に近づきたれば、奈何にせし給ふや、是等のことを商議せばやと、さてこそ招きまゐらせたり。忠兵衛これを聞いて、胸を撃ち長嘯をつき、我薄命て做すほどのこと渾齟齬、斯く憂事の重れり、是みな過世の因果にやよりけめ。今は術もつき果たれば、なか／＼に手を束ねて恥しめを受んより、兎ても角ても世にたちがたき身となれば、不孝不義とは想へども、今宵密にお

ん身を伴ひ、此花街を忍び出で、孫右衛門どのに手渡し、爾して後は運を天に任せ、警敵丑太を搜索出し、本意を遂げんと想ふなり。いざとく立退く身がまへしねと急がすれば、梅川は聞え給ふこと心を得はべれど、おん身は孝の爲に苦難を受くる旅路に行くを、など止まりて居らるべき。奴家も伴ひ給はれとあるを、忠兵衛そは道理に似て道理ならず、故奈何となれば、我とおん身と夫婦と云ふは私のことにして、誰か是をゆるしけるぞ。只我にまかせ給へと諫むるに、梅川今危急のときに望みて、云あらがひ時刻を移さば、妨ならめと、其意にうち任せつ。いざや逃れ走らんと、用意するさへそ／＼にて、既に忍び出でんとぞしたりけり。是時は是長祿三年の二月上旬にて、冬にもまさる春の夜寒に、俄に朔風雲を發し、雪片／＼とふり積みて、何方の隈



も白妙ならぬ處もなく、眩きまでに見ゆるは、實に銀世界とも云ふべくや。花咲かぬ木も花咲きて、いづれを梅とわきがたく、深雪に途も埋もれて、初更の過ぐる頃ほひは、人の往還もとだへして、さすがに鬧噪ふ鳥原も、寂寥として物淋しきに、鼾の聲の聞こえしかば、こは天の佑そと二人は密に忍び出で、前栽の垣を越えて出でんとするに、何者ともしれず梅川が裳をとらへ、やをれ姪奔女何方へ走り去らんとはするぞと、聲かけられて二人は驚き、ふり返り見れば此家の妓女松山なれば、こは妨せぞとふりほどかんとしたりしかど、固くとらへて放たねば、忠兵衛焦燥刀を抜き、裳を切れば、梅川は前へ俯に轉べば、松山は後方へ仰さまに仆るゝはづみに、剩池の深みにがばと轉び落ち、浮きつ沈みつ苦しむ間、いざと云ひつゝ、足ばやに、垣の外面にのがれ

出で、虎の尾を踏むこゝちしつ、大和路さして走りけり。そも今こゝに松山が、梅川を引止めしは、如何なる故ぞといふに、かねて八右衛門に頼まれ、忠兵衛と梅川が體たらくを窺ひしに、今宵忠兵衛もう來つれば、密に躲れ居て、其ものがたるを聞くに、既に逃れ出でんとするを見、其後を慕ひこれを妨んとし、却つて池の深みに轉び落ち、終に溺れて失せけるなり。此松山其身罪なしと雖も、悪人八右衛門を助けんとせしをもて、非業の死を遂げしにや、女心の愚かにして、其是非を論さるこそ淺猿けれ、こゝをもて女は罪深きものといふとおぼゆれ。斯くて忠兵衛、梅川の二人は、追人のかゝらんことを恐れ、街道をば行かで、徑を索めて急ぎけれど、梅川は素深窓に成人、夫よりして後は花街にあれば、たへて外に出づることなく、たゞ籠鳥のごと



く歩むになれぬ身なるさへに、殊に吹雪の風寒く、肌を刺すがごとくにて、忽ち手足凍へ歩み悩むを忠兵衛これを勦り、その志を勵ましつ、心は彌猛にはやれども、世を忍ぶ身は燈さへなく、雪のあかりを力とし、そこはかたなく辿るなれど、道はかゆかで漸くと、四つ塚の邊りに來りしに、はや二更の鐘かうくと音のふにぞ、忠兵衛心せかれ、斯くては夜明に至るまで走るとも、幾里をかくべきと、尙途を急がんとするに、脊後より呼ぶものあり。二人は愕然と驚き、こは我くを追ふ人なめりと、梅川をば側へなる稻村の蔭に忍ばしつ、おのれも俱に躲れんとするに、はや近づき來つれば是非なくも、これを願れば想ひもかけぬ、島谷八右衛門なれば、再び驚きまどふを八右衛門聲をあらゝげ、やよ忠兵衛みだりに走りな、我云ふことあり。汝今夜梅

川をつれて走らんとするとき、松山に見咎められ、これを殺して池に沈まし逃失せたるよし我島原にて委しく聞けり、彼所にては汝を捉へんと、所々に人を向はしたり。我は汝が故郷大和なるを知れば、必ず此道走るべしと猜し來りしに、案に違はずして此處にて出會たり。是松山が仇を報はんとには非ず、前の百五十塊の金を取戻さんが爲なり。只今すみやかに其金を返さばよし、もし爾らずば汝等を捉へ、市正に訴へん、回應いかにと罵れば、忠兵衛心裡には、我松山を殺す心はあらざりしに、彼誤つて自ら池に落入りしが、さては溺死しけるにや、それをもて我を人殺しと云ふなるべし、そは如何にいひわくるとも諾のふまじ。愍ひのことをせんより、迎も運を天に任せし身なれば、遁るだけは逃れ宿志を果して後、自ら名乗出て其罪に伏さんと、

心を定めしかば些もわろびれずして云ふ、我夢と松山を害せるにはあらねど、さる疑ひを受くるからは、いかに分疏すとも益なかるべし。また大内家より預りたる金のことは、只今は奈何すとも返すこと能はじ、日頃親みし好身には、我返すまでのうちをよく計置くべしと、常にかはりし回應するにぞ、八右衛門は呆れまどひて居たりしが、そのものいひさまの餘りに禮なきに、ますく怒を發し、やをれ忠兵衛、商人の身をもて武家を欺き、多くの金を騙取らんとする條、うへなき強盜なり。さるものをば斯くこそすれと、腰の刀を抜きはなち、只一討と斬りつくれば、忠兵衛はやくも身をかはし、欺笑て云へりけるは、今までは大内家へ首尾のよからんこと想へば、心にもあらで汝を敬ひつるを、虎威をかる狐とは心づかずや、今は何とて恐るべき、我をもて

盗人なりと罵れど、汝こそ山賊丑太が男兒なれば、前徑強盜をするなるべし。丑太は我深き仇なり、汝はそのかたさまの人なれど、親をこそ討つべく思へ、その子までは殺さじと、幾許の仁惠をなすに却つて我を殺さんとする條、天に對ひて唾はくに均し。其ことならば先づ汝を討つて、仇を討つの血祭にせんと、腰なる朴刀をぬきもて向ひ合て戦ひけり。八右衛門豫て、忠兵衛が體たらくを怪しと想ひ居たりしが、只今云ふを聞くに父をもて仇といふなれば、さてこそ思ふに違はじ、奈何もして殺さばや秘術を盡して切合ひぬ。かゝる折から花街の輩、梅川と忠兵衛が行向を搜索と、此地方に追來りしが、二人白刃を合せ戦ふを看、みなく聲々に人殺の忠兵衛、逃さじやらじと叫びけるにぞ、八右衛門はこれに力を得精神を倍すに、忠兵衛は多勢の走來るを

見て、今ははや遁れぬ時と覺悟しつ、聲を勵まし討つ太刀を、八右衛門受損じ肩先より乳の下まで斬下され、血煙はつとたつよと見えしが、兩斷となつて失せにけり。すきもあらせず花街の大勢逐迫りしかば、忠兵衛これを支へんとすれど、只今八右衛門と戦ひ精神既に盡きぬれば、争ふべき氣勢もなく、ほと／＼危ふく看えたる處に、怪しむべし何方よりともなく、三四匹の牛忽然と顯れ出で、たゞ今逐來る花街の們に對ひ、兩の角ふりもたげ、突いてかゝればさしもにはやる追人の大勢、此牛に追立てられ、四方に走り逃去りしは、彼田單が火牛に燕軍を破りしも斯やとばかり思はれぬ。忠兵衛奇異の想ひをしつ、又も追人のかゝらぬ前にと、梅川が手を助け牽き、下鳥羽さして逃れ行く。今茲に忠兵衛梅川が危難に望めるを、不圖三四匹の牛現はれ出で

て、追人を追ひ走らし、二人を救へることはまた彼撫牛のこゝに靈を現はすにこそ。そもく此靈牛、梅川が身の守護となりしこと屢なり、初め古乃花たりしとき、帶解へ行くに及び、長櫃の裡に入代りて、惡僧寂巖が毒手を免らし、其後忠兵衛との妹脊の氷人をし、今又此危急を救ふ。都て三たび、且忠兵衛この撫牛を懐にせしときは、八右衛門に返すべき金につまりけるに、此牛の腹より塊の金を出して其急を凌がすことなど、渾此の撫牛の冥助によれり。もと是土をつかねて其形を作りしものなれば、靈のあるべき道理あらねど、物は人の信するにによりて自ら靈あることにや、こゝに比すべきはいとかしこけれど、佛菩薩も素これ、木石金土をもて作り奉りぬ。同じ木石にて、おなじ尊像を、同じ人の作るなかにも、信する人の多き御佛は、靈驗もまた新

なるものなり。此撫牛も梅川が、他念の赤心を盡し信じ奉るにより、かく屢靈驗を現すにこそ。

○雪夜道を過つて再び危難に遭ふ

こゝに帯解寺の住侶寂巖は、古の花の色香に迷ひ、地藏尊を餌にし、幻術をもて孫右衛門を欺き、古の花を奪はんとせしかど、佛罰にやありけん謀相違し、牛の爲に辛き目に遭ふのみか、寺に住職すること能はで、其所を亡命て四方を左遷しかど、口を養ふ生營なければ、詮すべなく人の門邊に立ちて食を乞ひ、纒に其日を送りしが、斯くては世にある甲斐なし、奈何もして俗を騙かし、今一回世に發達と多くに心を勞すといへど、一事も做し得ることなく、飢餓は日々に迫りけり。正しく是佛罰とは云ひながら、一つには知の足らはぬにや、故奈何と

なれば、今迄は帯解寺の住侶なるをもて、人も信じけるを今はそれにはあらで、知らぬ國にてしかもみすばらしげに頭陀の行をすれば、誰かこれを信じ尊まん、寂巖心鈍くこれを悟らず、尙昔の術をもて、人を欺かんとするこそ淺猿けれ。斯くさまよひ、ゆく／＼山城の秋しく山の邊に、しばらく足を止めつるに、其所にかたばかりなる廢庵のありしを、郷人等の憐みによりこの庵の主となり、晝は終日四方に齋を索め、漸く其日の飢を凌ぎけり。しかるに長祿三年二月の上旬、雪ひどう降りたれば晝のうちより閉籠り、圍爐裏に柴折くべつ、濁醪を煖めこれに酔を盡し、そいろ心になりて雪のふるをうち望むに、庭面せの梅は我時得顔に雪を犯して發花、馥郁として匂やかなるに餘念なく看とれ獨語していふ、梅は諸の花にさきだちて發くをもて花の兄とい



ひ、古よりこれを受づる人多かるなかに、王仁我國に聖の書を傳へける初に、文華のひらくはじめと云ふ心にや、難波津に咲くやこの花の大和歌をよみしより、今も梅をさしてこの花とは云へり。我もその名の處女子が色香にまよひ、一寺の住侶と仰がれし身の、斯く零落て淺猿しき姿となるも、これ其人の故ぞかし。思へばこの花恨みありと、側にありあふ斧を提げ、梅の木下に走りより、落花微塵と伐りけるは、酒狂の上とは言ひながら、正しく狂人のごとくにぞありけり。心のまゝに枝うちおとし、あな燥脾骨と云ひつゝも、伐りたる枝を取集めつ、やがて圍爐裏に折くべれば、梅花の薫り香ばしく、庵の裡に満たり。折から柴の扉をほとくと音のふものあり、寂巖これをうち聞き、あな不審、原來此地方は人郷に遠く、兎幽林に穴を藏し、狐深草に跡を

印し、颯々たる風、蕭々たる雨の外、樞を敲くものなく、人跡絶えたる此庵なるに、しかも雪の夜の更たけたるに、斯くおとづるゝものは誰ぞや、想ふに狐狸の驅かすにあらずは、必ず冤鬼の迷ひ來て、屈を訴へんとするにやとあるに、門邊に女の聲とし、是はさる怪しきものに候はず、京の者にて、大和にまかりなんとする途にして、不圖難に遭ひ、伴ひし人をも見うしなひ、心ならずも此地方にさまよひ來つるに、今は足も勞れはべりぬ。あはれ今宵一夜の宿りを惠給ひなんやとあるに、寂巖女の聲にいよ、怪しみ、こは奈何なる化物ぞと、立出下雪あかりにすかし見れば、齡二十ばかりと見ゆる艶女の只一人佇居るにぞ、寂巖心中おどろきおそれ、此深夜におよびかゝる美人の來る所謂なし、想ふに世に云ふ雪女てふものなめりと、口に光明眞言の咒を唱へ、

手に印を結び、只願立去らんことを祈りけり。此艶女は原何等の人ぞと思ふに、則ち是梅川にてぞありけり。前に危難に遭ひけるとき、靈牛の助により、忠兵衛と俱に其處を逃れ走りたりしが、あまりに心慌忙て、半途に於て忠兵衛を見失ひ、途を歩迷ひて此地に来れるとなり。さても寂巖はしばらく咒を唱へ印を結べど、素是妖怪にあらざれば、此所を去らでありければ、あやしき限りなく眸子さだめ、再び看一看れば、こはいかに口頃戀慕ひつるこの花なれば、あまりに思ひがけざることにて、心まどひ言語なく、只呆れたるばかりなり。梅川もこの時庵主を熟くみるに、いと寢れたれど、紛うべうもなき寂巖なれば、戦き恐れ、さては此庵は悪僧寂巖が住居なりけるにか、おもはざりき草を踏て蛇を驚かさんとは。又も憂目に遭ふらんと、既に身を轉して

走り去らんとするを、寂巖慌忙これを引き留めて云ふ、やよめづらしや、いかにこの花、絶えて久しき見參に、言語さへかはさで此處を去らんとするこそ難面けれ、見給ふごとく斯く零落たるはは何ゆゑとか思ひ給へる、偏へにその故をもてなり。此身になれどおん身を慕ひこがるゝこと、露怠る隙もなく、いかにもして環會ひ、想ひを晴さで止むべきかと、甲斐なき命を存命て、胸の煙のやむときなく、今も今とて庭もせに咲きにし梅を看るにつけ、その名の思ひ出され、あまりに心苦しさに、熟回せばなかく、見ては思ひのたねなりと、その枝を伐取つて圍爐裏にくべし折からに、不料もそのもう來給ふこと、ひとへに我念力の通ずる處なるべし。かばかり想ふ心根を、あはれみたびねと梅川が、手を取り程に入んとす、梅川は此首尾をうち聞

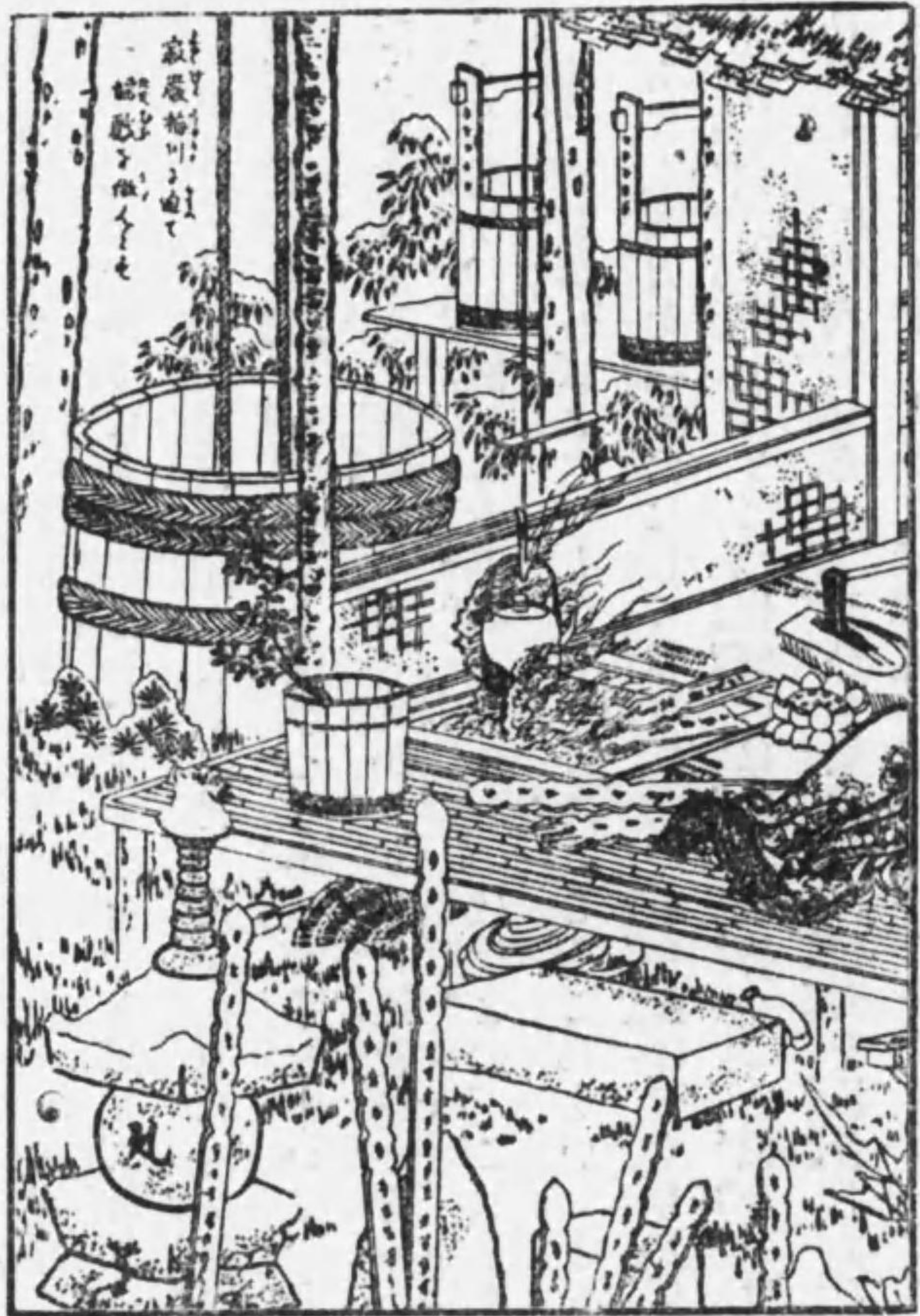
き、さては此法師前に佛の告と偽り、我を迎へて恥かしめんとせしにこそ、さる邪をなすをもて、佛罰を蒙り此さまに零落たるなるべし。されど命恙なきは、佛の深き恵ならん、また我身遠近を漂泊しは幸なきこと、思ひしに、是は此悪僧が毒計を免らし給ふ、御佛の冥助にやありけめ。彼といひ是といひ、難有方便なるに、此僧前の佛罰にもこりず、今また迫つて奴家を辱しめんとす、かゝるものを強く罵り恥しめんと欲せしが、また想ひ轉しけるは、人里遠き此所にて彼を怒らしめば、如何なることをせんもしるべからず、望みある身は忍ぶにしかじと、俄に笑をなして云へりけるは、數ならぬ身をさばかり思ひ給ふは喜ばしけれど、我身幸なく去年、御僧のもとにまゐらんとせし途に於て、山賊丑太と云ふもの、爲に勾引され、妓女の身となり名も梅川

と叫りしに、忠兵衛と云ふ人に想はれ、彼人奴家が身を贖ひて妻としはべれば、今は主ある身となれり。かゝれば我身といへど、わが心のまゝにもあらず、此道理を辨へて、ふつに想ひ切り給はれと、云聞こゆれば寂嚴は、いと乏趣なるおもちしつ。さてはおん身ははや人の花となりけるにや、よしや爾ありとも何か厭はん、今宵遣ひしは優曇花の花咲く春に遭ふ心ちぞすなれ、今よりは忠兵衛がことを想ひきり、我妻となりて給はれと、思ひ込んだる光景は、何と云ふとも免すまじく見えしかば、彼是云はんも詮なし、只早く此處を逃れんと、其隙を窺ふを、寂嚴早くもこれを猜し、是非を聞えず、梅川をひきとらへ、庵の裡に引入れつ、梅川は譬死すとも身をば汚さじと、覺悟を決め聲を勵まし、やをれ寂嚴其身出家人にありながら、五戒第一の邪淫を犯



さんとするは何の道理ぞ、さる正なき心あるをもて、かく佛罰を得たるを悟らず、尙執念するこそ淺猿けれ、奴家が世にあればこそさる心のやむまじければ、いざとく殺して想ひ断ちね、若し前非を悔ひて善心になれば、速にこゝをいなしめてよと嘆きつ詫びつ口説ども、一心凝りたる寂巖が、煩惱の暗に心もくらみ、嗚呼は何事をか云へる、そこを殺して我望は何をもて遂げん、畢竟忠兵衛とやらのあればこそ、彼是くたくしきことを云ふなるべし。其事ならば彼をなきものとし、此世にあらしめずば我心に従ふや否、回答は奈何と掬問に今は何とも詮すべなく、泣くより外のことぞなし。此折から忠兵衛は、前に梅川を見失ひ心も心ならず四方を尋ねけれど、其行衛を索めかね不料此地方に來かゝりしに、荒果てたる庵の裡に、女の泣聲の聞えしかば、胸

おどろかしつ、さし覗き見るに、我妻梅川を大の法師のおそろしげなるが、引捕へて戲んとする光景なれば、なじかは少刻も躊躇べき、忽ち柴の門扉を踏破り、庵に飛入り言語をもちはず、法師をとらへ彼所に撲地と投つくるに、寂巖想ひがけず投られて、腰の邊を痛く打しかば、忽ち氣も消え心もうせて、少刻絶え入りてぞ居たりけり。梅川は此體たらくを看、正に旱天に水を望み、雪中に炭を得たる思ひをしつ、斜ならず喜び忠兵衛に對ひ、前におん身を見失ひて途にまよひ、此處にさまよひ來りしに、何ぞはかるべき此僧に環會ひぬ。こは前に帯解の住侶なりし、寂巖にてはべるなり。彼豫て奴家に懸想しつるが、今こゝに遭ひたれば、是非を辨たす迫つて戯れかゝりしと、ありし體たらくを物語るに、忠兵衛これを聞くよりもいたく腹立ち、怒に堪へず既



に寂巖を斬らんとすれば、梅川これをおし止め、此法師いと惡むべきものにはあれど、かりにも佛の形をなすものを、みだりに殺さんは勿體なし、只此まゝに捨置き給へといさむるに、忠兵衛實にもと諾ひつ。かゝる處に長居は害あり、いざと云ひつゝ梅川が手を率いて、庵の裡を出でんとするとき、寂巖むつくと起かへり、行道を遮りとめ、忠兵衛にうち對ひ、我戀せる女を妻とするものは汝よの、こは是戀の仇人ぞ、速に女を與へばよし、しからずは斯うこそこれといふまゝに、隠し持ちたる戒刀を抜きはなして斬付れば、忠兵衛はやくも身をかはし、あざみ笑つて云へりけるは、出家には數珠を持つこそ似合しけれ、あらぬ業して怪我なせそと、云ひも果たぬに佩刀を抜合してぞ切結べり。梅川は是を見て、もし忠兵衛に過失あらば奈何にせんと、右に

まはり左にまはりて、只顧これを助けんと氣をあせれども、女子の甲斐なき身には徒に心を惱すばかりなり。時に不思議や何方よりともなく、一棍の手裡劍飛來り、寂巖法師が胸さかにぐさと立つにぞ、なかば少しもこらゆべき、阿と叫びつ仰さまに圍爐裏の上に倒れかゝれば、燃え居る柴の一時に、はつと消えては忽ちに暗夜となるにぞ、忠兵衛はあはやと驚き、此處に居るは石を抱いて淵に臨むよりも危し、いざ退くべきに我妻と、梅川連れて行かんとす。折柄颯と吹來る吹雪につれて圍爐裏の柴、再び焰々と燃上れば、索めざれども寂巖が身は鳥邊野のそれならで、茶吡の烟となりにけり。此とき忠兵衛この火の光に乗じ、邊を看ればこはいかに、順禮めきたる男の、深き窟を目深にかぶりたるが佇居れり。忠兵衛不審こは何等の人ぞと問はんとする

時、外方に多くの人音聞こゆるに、こは正しく花街より我々を追來し人かと驚くを、彼順禮の男後の方を指さして、此道筋を真ぐに行けば大和路なり、この處をば我に任せ、とく落ち給へとす、むるに、後の利害をいざしらず、今の危急を救ふを喜び、辱しと忠兵衛は、梅川連れて後道より、大和路さして遁れ行く。そも此順禮は是何等の人に於て、何の故をもて期くはなすぞ、且忠兵衛梅川、何方に走り奈何なることをかす、そは此卷の末をよみて知りたまへ。

○園女姑を憐みて囚繫に換らんとす

こゝに忠兵衛が養親妙閑は、某日は良辰なるをもて、園女を迎へんと只願其準備の外他事なかりしに、昨日忠兵衛家を出でしに今にかへり來ざれば、こはまた例の妓女がもとに行きしにや心を惱す處に、

市正の命を稟け、所の長が案内して、多くの捕兵入來るにぞ、一家の男女驚きまどへば、捕兵のうち頭めきたる人の云へりけるは、此家の主忠兵衛島原の妓女、松山を池に沈め、梅川を奪ひ立退く途、四ツ塚において大内家の士、島谷八右衛門を切害に及びし條、島原のもの、訴へにより、忠兵衛を召捕らん爲に對ふたり。主は家に居るや否、明白に聞ゆべしとありたるにぞ、妙閑これを聞いて愕然とおどろき、あまりのことに言語さへ出でず、只呆然たるばかりなり。やゝありて云出でたるは、命承り驚き入りて候、我子忠兵衛昨日家を出ではべりし儘にて、今に還り來ざれば、いと覺束なくも思ひきや、さる癖事をなすべしとは、かれが去向夢ばかりも知らざること候へど、我子の爲せし罪科を知す顔すべきにあらねば、彼に代へて奴家をいかに

ともはからひ給へと、わろびれもせで云聞ゆるに、捕兵の輩是を聞き、忠兵衛がなせし所爲をば、妙閑實にしらず、素より家裡に居るべきにあらぬを知るといへども、手を空しうして還らんは市正の制た、ねば妙閑に對ひ汝が云所僞なくば罪なし。されど忠兵衛が行衛する、まで、所の長がもとへとらへ置いて、人質とせずば公の制立がたし、其旨心得よとあるに、妙閑辭む色なく、命畏りぬと肯ひて、既に牽れ行かんとするを、管店彦六これをとめ、僕不肖なりといへども此家の長なり。萬づ主の代をなす身なれば、老母を免して某を誘引給はれと願ぎ聞ゆれば、妙閑これを制し世に用なき老が身は奈何なるとも妨なし、只此まゝに奴家をいなすべし。家子ながらも忠兵衛は心直ぐにして、癖事すべきものにあらぬを、いかなる天魔のみいれにて人をあ

やむる大罪をば犯したるにや、汝はいかにもして忠兵衛に環會ひ、やむことを得ぬことならば、奴家がことを心にかけて、做すべきことを果さすべしとよく云ひ傳へてよ。そもやかほどの事のあるならば、なさぬ中でも親子なり、など露ほども聞えずして、かゝる事には及ばしつるぞ、園女を迎へさすべくするも、八右衛門に金を返させしも、みな家子のよきをはからん爲、做したる所爲にありしかど、今更思へばなかくに、仇となりしか淺猿や。さぞな奴家を頑しと、恨みんこと苦しけれ、これらの事も告げよかすと、いひつゝよと泣き沈む、義理ある中の子を想ふ、親の心ぞ憐れなり。捕兵をはじめ所の長も共に憐れと思へども、斯くては果てじと心を勵し、時刻移ればとくくと急がしたてゝ連行くに、彦六はこの光景を看るに忍びず、家身をも

つて代らんといへども、妙閑諾なはず、奴家が言を聞きわけず、強て争ふほどならば、主従の縁を断るべきに、なほ是にてもやむまじきかと、厳しき主の言語には、何と回さんやうもなく、躊躇うちに妙閑は誘引れてぞ出で去りぬ。これはさておき、こゝに園女は、許嫁せし忠兵衛人殺の罪により、其去向の知るゝまで、母の妙閑は所の長がもとに、人質となり捉へられしと聞くに、心も心ならず深く嘆き悲むにつれ、我身の上を思ひまはせば、父母には早く後れ、樂しからぬ世を経るうちに、不圖忠兵衛が妻となるべきになりしかば、かぎりなく喜び思ふ甲斐もなく、婚縁さへせざる前に、夫は去向なくなり姑は囚はれの身となること、是みな我身の幸なき因果なりけめ。一回納采を受けたれば、忠兵衛は夫なり、妙閑は姑なるを、其危難に遭ふを餘所に看

ることやあると、叔父なるものにそのよしを聞ゆるに、そは道理なれど、公にも忠兵衛が妻あることはしろしめさぬを、自ら名乗出では、我まで奈何なる連坐に逢はんもしるべからず。此事かまへてあるべからずと免さねば、園女は其薄情なるを方見思へど、さすがに叔父の志に乖んこともなりがたく、獨心を惱して夜晝となく嘆きあかしぬ。然るに此事を妙閑傳聞き、其志のほどを深く感じ、密に彦六をまねき、園女が心ざまのほどを云聞え、汝いかにもして忠兵衛が去向を搜索、園女が貞烈志を云聞し、梅川との縁を断り、其身の罪の分疏よすがあらば、世間を晴れて婚縁せさすべし。もし其事の叶はずば、いかなる地方へも忍ばして、兎にも角にも夫婦とし、園女が志に報ゆべしと、よぎもなく頼み聞こゆるにぞ、彦六も其健氣の志を感じ、命

承りはべりぬ、力を盡して主の行衛を搜索し出し、宣すことを果すべしと諾ひ、心裡に思ひけるは、此事我一人の力にも及がたし、まづ大和の忠三郎にこたびの事を告知らし、力を合し探さんと直に大和に立越えけるに、此當時忠三郎は、父貞輔が菩提の爲、西國卅三所の觀音菩薩を、順禮せんと出行きぬとて家にあらず、母の道芝は此程より風の心地せしが、今は重やかになり命のほども危ふきさまなるにぞ、彦六はこれを見、もし忠兵衛が身のうへを告聞かさば立どころに病重りなんとし思へども、知らさで止むべきにあらねば、忠兵衛梅川を連れて立退きたるさへに、人を殺せし罪ありとて、妙閑は忠兵衛が出づるまで人質となり、所の長がもとに囚へられ居ること、また園女が貞しき志氣あることを、妙閑聞及び奈何もして、忠兵衛と婚姻させよと

ありしことども、詳に物語せしかば、道芝大いに驚き、忽絶入るばかり嘆きしが、やゝありて云へりけるは、忠兵衛が事は我と招きたる禍なれば悔ゆべきにあらず、其禍養親に及ぼすこそ方見けれ、奴家これに代らんとは思へども、此病にかゝり今は限りと覺ゆれば、心ばかりははやれども甲斐なし、よりにて一枚の遺書をまゐらすほどに、これを妙閑どのに送りてよと、重たげなる枕をあげ、やをら書を書つけつ、彦六に與へけり。これまでは心も亂れずありしかど、重き病に氣もよわりたるに、憂事のかぎり聞くのみか、千萬の思ひを筆にのべたれば、忽ちやたけ心もつき果て、尙云遺さんこともあるべきに、それさへならで終にはかなくなりけるは、憐なりける光景なり。前に忠三郎旅發するとき、留守のことをは主の孫右衛門に頼み置つれば、

道芝が病にかゝりし初めより人を附おき、こまやかに介抱さしけるが、只今歿命たれば其まゝ告知らすに、孫右衛門家僕のうち事老練たるものを引具しきたり、何くれの事忠やかにとりおさめぬ。此とき彦六は、孫右衛門に名對面し、こゝに來りし縁故を委しう告知らすに、孫右衛門おどろき云へりけるは、忠兵衛が幼ごちより其體たらくを看しに、志直なるものなれば、さる正なきことをばせざるものと思ひきや、かゝることに及ぶべしとは、こは必ず縁故こそあるらめ、汝力をつくし彼が去向を搜索出すべし。もし黄金などのことにて、世にたちがたきことあらば、心置なく告聞ゆべし、我力の及ばんかぎりは整はしやるべきにと、いと念頃に聞ゆれば、彦六その志の程を感佩しつ、厚く禮をばのべにけり。さて道芝が屍を送葬するに及び、彦六も我主の

かたわれ人なれば、萬づ孫右衛門が旨をうけ、忠やかに物し終り、別れを告げて其處を出去りしが、道芝が遺書もあれば一まづ都に歸り、妙閑尼に逢ふて道芝が最後の光景、且孫右衛門が云聞えしこと々も委しう物語りて、かの遺書を與へしかば、妙閑は其死を憐み、孫右衛門が心ぞへのほどを喜び、まづ其遺書を閲たりしが何事をか書つけん、讀果ていと心おち居たる顔色し、彦六にむかひ、奴家前には忠兵衛が去向を搜索、園女と婚縁をさせよと云へりしかど、熟々想ふにこの事は何方とも思ひわくかたなければ、たゞ雲を攫むに均しく勞して益なし。今より此事をばふつに思斷り、龜屋が家を相續するやうを議候へ、奴家も年老し身なれば、たとへかく囚はれとならずとも幾年をか經ん、明日にも歿命たらん跡をば、よきに弔ひてたびね。さて園女が事はく



れくも志氣の健氣なるが優恤さに、漏らすべき事には非ねど、一封の裡に秘めしことをはじめ、奴家が心さまの程をも書つけおくるべきに、そこもともに讀みて忠兵衛をはじめ、奴家が身のほどをも知り候へと、紙筆を乞ひて一枚の書簡を書與ゆるに、彦六は妙閑が前の志とは差ひたるをあやしめど、書簡の裡に深き縁故を記したりとあるに、問ひさきうらむやうもあらねば、やがて書簡を懐にしつ。急ぎ園女がもとに行かんとせるに、日ははや黄昏過ぐる頃ほひになりしかど、書簡のやうを聞かんが爲に三條を南の方に五條をさして、園女がもとに行かんとして、松原通に徑過しに、對ひの方より容貌艶やかなる處女の、喘息くく來るありしが、いと怪しく思ふに間なく行遣しかば、瞳をさだめて看一看るに、擬ふかたなき園女なれば、慌忙く聲をあげ、

こは黄昏に及び従者もなく獨何方へか行き給ふと、問ひかけられて園女は行過ぎしが立戻りてこれを見るに、彦六なればこよなく喜び、こは思ひかけずや彦六、奴家がとくに來るは深き縁故あり。まづ人の聞かざる處に誘引ね、足下に頼むべき事こそあれと聞ふるに、僕もおん身にまゐらすべきものありて、只今おんもとへまかりなんとする處なり、いざまづ這裡に入らせ給へ。と側に社のありけるに誘ひしかば、園女はしばらく息を休め、さて云出でけるは、奴家姑の囚はれ給ふと聞くに悲しく、これに換へんとすれど叔父君のみゆるし給はねば、心ならず今日までうち過せしに、あまり思ひに堪へかねたれば、密に忍び出てそこを頼み、所の長がもとに赴き、思ふほどのことを頼み聞え、若し叶はじとあるならば、忽ち容貌をかへ尼法師ともならん覺悟なり、



よき處にて逢ひたれば、今速に姑のおはす長が許に誘引てよ。と涙と共に頼み聞ゆれば、彦六はこれを聞きて感激の涙に袂を濡さし、少刻回應なくてありしが、やゝありて云へりけるは、嗚呼聞えざるは忠兵衛どの、かゝる妻をふりすて、妓女に心を奪はれて、逃走りたるゆゑをもて、母に難義をかくるのみか、多くのひとにさまぐの、嘆きをさすは何ごとぞ、正しく天魔がみられしか、情な心かな、それにひきかへ園女主は、忘らるゝ夫の心を恨み給はでなかくに、姑の難義に其身をもて換へんとせさし給ふ貞操には、古の賢き女にもおさく、劣り給ふまじ。その御志のほどをば妙閑どのも知り給ひ、いと憐におぼし深き思ひをこめ、秘めおけることを、詳に書いつけて、これを御身にまゐらせよとありしほどに、只今其御使にまゐる處なりと、

袖の裡より、一封の書簡を出して與ゆるに、園女はこれをおしいたゞき、封を開いて讀まんとすれど、涙に文字もあやなくて讀兼ねるを、彦六その心を勵まし疾くくとあるに、やをら涙をおし留めてこれを讀む。其略にいふ、その志氣のほどを仄かに聞くに、實に憐れにありがたくこそ覺えはべりぬ。そも這回の一件は、みな奴家が鈍くて思慮なきよりおこりつること、今更後悔するに甲斐なし。故奈何にとなれば、忠兵衛ことは養子とはいひつれど、實は故主一色直兼公の御子にておはすなり。直兼公は去る永享十年、鎌倉の亂に失せ給ひき、その折から乳人道芝、其子を懐にしさすらへ來て、大和の桃井孫右衛門どのゝもとに養なはれておはしき、此孫右衛門どのとは一家の好身あるをもてなり。其後家夫彼御子彼所に在すを知り迎へ取り養ひたり。

乳人といふは夫忠平どの、姪なれば、ともに迎へんとせしかど、これは孫右衛門どの、はからひにて、貞輔に娶し給ひたれば、その儘に残し置きぬ。其頃直兼公の御子といふことは世に憚れば、貞輔が子を養子にせりと披露せり。さる縁故あれば奈何もして、武士になしまゐらすべく思ふうちに、夫忠平どののは没命給ひ、子と云觸れたるにやむことなく、家を嗣し時節もあらば、夫が志を果さずやと思ひつるに、去年よりして島原通ひすること頻りなれば、よしなき妓女を妻とすることもありば、時を得て武士とならんするとき、彼が妻は素は妓女なりなど、人に後指さ、れんはさぞ心苦しくやありなんと思ふよりして、おん身を迎へさすべくしつるに、何ぞおもはん梅川は、孫右衛門殿の女兒、古の花と云ひけるを、山賊丑太と云に奪はれ、妓女

の身となりしを忠兵衛はからずも彼人に相馴れて、其素性を聞くにその儘になしがたく、奴家にまでかくし、身請して大和に誘引、親子の對面をさすべく大内家より預置きたる金をもて、梅川が身を購ふ開手に渡し置き、残の金を才覺するうち、其期にや迫りけん、彼人を連れて立退きしならん。其途にして八右衛門と争ひ、終に彼を殺しつるにや、八右衛門と云へるは大内家の侍なれど、もとは梅川を奪ひし山賊丑太が子なる由、丑太は大和國桃尾山にかくれ住む山賊にて、貞輔を殺せしもこれが所爲なることを、忠兵衛梅川に聞き、彼を討んとその事を忠三郎に物語しを、道芝立聞き忠兵衛其身、直兼公の御子なることをしらで、貞輔を實の父と思ひ、仇を報はんとはするらん、もし過失あらば冥土の故主にいひわけなし。と密に實子忠三郎に其實をあか

し、早く丑太を討し心苦しきをやめんと、忠三郎を順禮に打扮せ、仇討に出しやりぬ。と道芝がもとより細やかにいひ來せり。奴家とても主を子といひつること、其恐少からず、何をもてか罪を償はん、然るに今その人の爲に囚はれとなりつれば、少しは罪を減すすがと思へば、いさゝか恨むべき心はなく、なか／＼に喜ばしく侍るなり。此事深く秘めることにはあれど、おん身が切なる志に愛て知らしまるらすなり。忠兵衛が事はさる縁故あれば、とても夫婦となることは難かるべきに、是迄の縁とあきらめて、いかなる人の妻ともなり、後の榮をはかり給へ。今までの心盡しは縦令死すとも忘れはせじ、あなかしこ此事人に漏し給はで、奴家が言葉にまかせ他に嫁ぎ給へかし、とぞ書いつけたり。園女はこれを讀果て、わつとばかりに臥し轉び、聲

の限り嘆しが、やゝありて云出でけるは難面姑の命かな、いつそ賤しき身ながらも異夫をもちて、何とて後の榮を棄くべきや、たとへ枕はかはさずとも、納采をうくれば妻なるを、忠兵衛どのにも聞えずして、姑の心ひとつをもてさることを宣すこそ心得ね。忠臣は二君に仕へず、貞婦は二夫にふれずとは、聖の教給ふなるに、奴家をして節を失ふ罪人と、せさし給ふか情なや、豫て梅川に迷ひ給ふ家夫とはしりながら、姑の囚はれに換らんとするはは何の故ぞや、人の妻たるの道を盡さんと思へばなり。さる心なるに、など姑の宣はすとて其命にしたがふべき、斯くあぢきな世の中に、何樂しくて存命ん、寧そ死ぬこそ増ならめと、かき口説きつ嘆きしは、道理せめてあはれなり。彦六首尾を聞くに、園女が嘆き道理なれば、さしぐむ涙をおしとやめ、

御嘆きはさることながら、妙閑どの心には、おん身のわかくて婦婦にならんを憐みて、秘めることをも告げしらし、他に嫁げとは宣ふなるべし。されどもおんみの志氣思ひきはめ給ふからは、某不肖なりと雖も、丈夫の身なり、誓つて忠兵衛どの、去向を搜索、夫婦となさしまゐらすべし。若そのことの成得ずば、おん身も我も世を捨て、佛の道に入るべきに、心づよく思せよと、諫に園女は顔をあげ、奴家妬むにあらねども、一回は夫に環會ひ、互に心さまの程をいひもし聞きもしての、後には兎も角もなすべきに、誘引てたべとありけるにぞ、彦六は、仔細候は、何方までも俱ひまゐらせん。忠兵衛どのも梅川も、大和は由緒の國なれば、まづ大和に立越え探ばやと、夫より園女をいざなひ彼所に赴きけり。こゝに桃尾は、孫右衛門が住所に程も近けれ

ば、其邊にさゝやかなる廢家のありけるを贖得て、これに住居りぬ。園女は豫て地藏尊を信じ奉りつるが、這回の一件は佛の冥助にあはでは叶ひがたしと思ふに、幸ひ帯解寺近かりしかば、日毎に歩を運び、只願夫に遣はしたまへと祈りけり。

○名器徳著くして惡に禍し善に福す

今年長祿三年の春、都には東山殿新にひとつの殿造せさし給ひ、花亭と稱し給ひけり。其結構、彼の秦の阿房宮にも比ふべくぞありけれ。かゝれば御殿の調度にせさし給はんと、天下の名器を集め給ふこと頻りなり。こゝに園女が叔父を蕭七と云へりしが、其性利を貪り欲を逞しうする癖あり。前に園女が妙閑の囚れに換らんといひしをも、己利なく損あるをもて、これを止めたるほどのしれものなりしが、這回東山

殿名器を集め給ふと聞きひとつの欲心をぞ發しけり。そは奈何なることぞといふに、園女が親進の何某が家に、代々持傳へたる杜鵑香爐あり、こは世に類なき名器にて、其持ちたる主の身に横難あるときは、必ず聲を出して其兆を告ぐるとぞ、此香爐のことは世に知られてぞありけり。然るに進夫婦一時に死にたりしかば、女兒園女を養育すべきものなく、叔父なるをもて蕭七園女を迎ひ取りけるとき、此香爐も共に來りしを深く喜び、これを我物にしつ、售代かへて多くの黄金を得んと、四方に售らんことを募れど、あまりに多き價をもとむなれば、其主を得ず空しく櫃に藏置きけれど、熟く想へば斯くては用なきものなりと、奈良に富める商人のありけるもとに、百塊の質に入置きけるが、這回東山殿名器を集め給ふと聞き、此時を失ふべからずと俄に百塊の金を

懐にし、奈良に往きて請戻し、早くこれを獻り、多くの黄金を得んと道之急いで還りけるに、桃尾の邊に逕過頃ほひ、日既に暮しかば今宵はこゝに宿りを借らばやと思ひけれど、絶えて人家あらざれば、心の裡に想ふやう、寶持つ身のかゝる處にさまよひ居らんはよからじと、足を早めて行く處に、一人の旅客背後より來るあり。蕭七は夜道の獨旅といひ、殊に寶を懐にしつれば、草木にも心を置くなるに、此旅客を見て心驚き、とく行過ぎんとするを、彼旅客呼止めて云ふ、やよ旅人よ急ぎ給ふな、云ふべきことあり。此街道は盗人多しと聞くに、況いて夜道なれば甚勞神、道連となりてたべとあるに、さすが逃走らんはなか／＼に、弱氣を示すなれば男たましひを据えつ、立止まり、おん身も一人にておはすにや、こはよき道連なりいざ俱に。と云ひつ

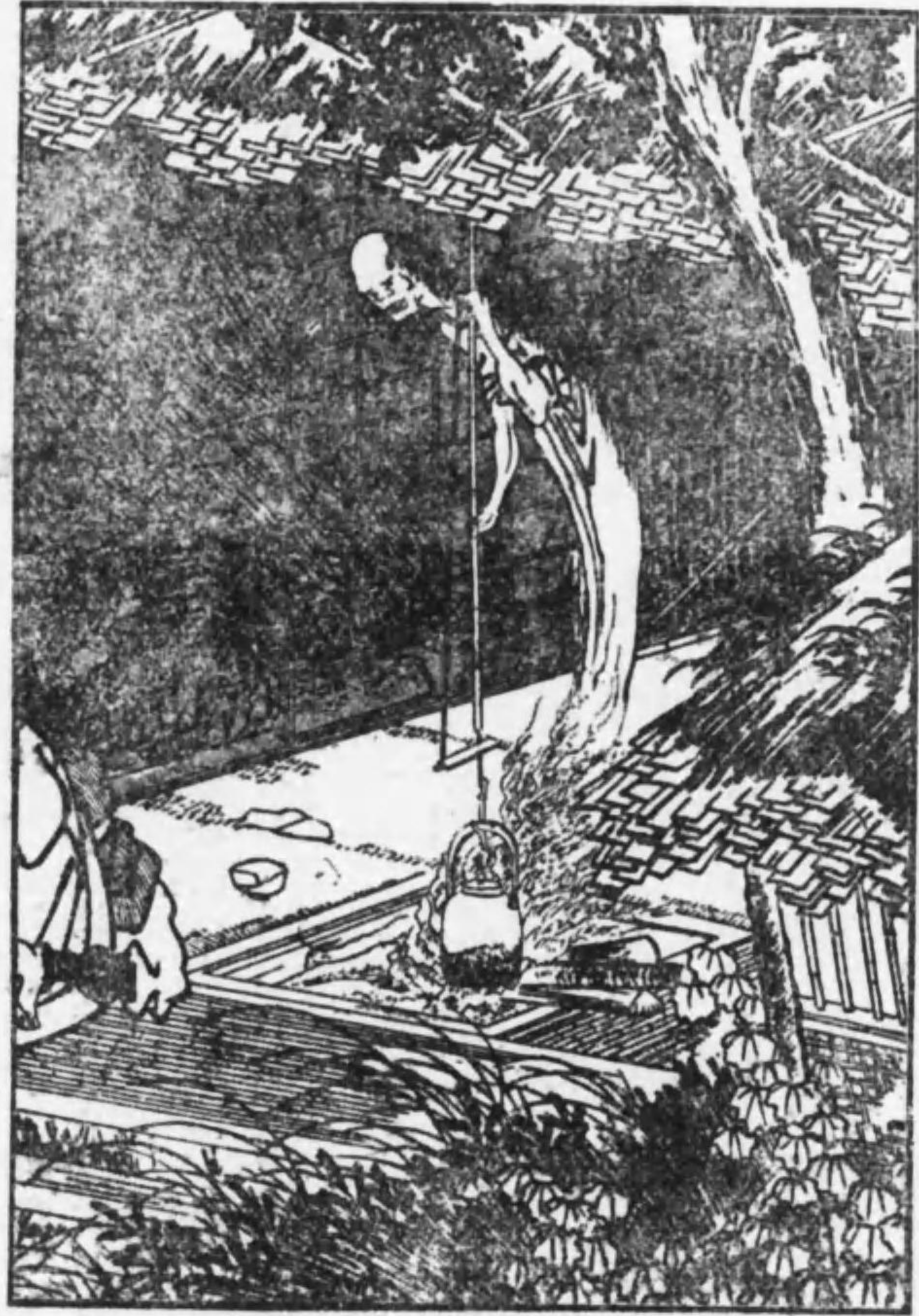
その人を見るに、年は六十にやあまりつらんと覺ゆるが、いと逞しげなれば、こやつ曲物よとおもひ、些も油断せでうち物語ひ行く處に、不思議や蕭七が懐のうちより郭公の一聲聞えければ、蕭七さてこそ曲物我を害せんとする心ありけり。彼に先んぜられんよりは、と聲をもかけず拔打に旅客を目がけ斬付くれば、旅客は早く身をかはし、其手を捉へ撲地と投付け、膝下に引据え、いきまきして云へりけるは、汝何の恨ありて我を殺さんとはするぞ、明白に云ふべし。もし陳ずるに於ては、立處に命を取らん、奈何にぞやと罵れば、蕭七とても叶はざるを知り、戦きて云へりけるは、あな免し給へ、我おん身とする人にあらざれば、恨むべきいはれなし。さるを討ちまゐらせんとするは、我懐に蜀魂の香爐を持てり、これは世に少なる名器にて、持てる主

に横難あるときは、必ず聲を出してその禍を告ぐるなり。今時ならぬ杜鵑の聲せしは、懐の香爐の鳴けるなり、さればおん身我を害し給ふやと思ひ、此仕合には及びつるなり。命に代ふる寶はなし、此香爐望み給はゞまゐらすべきに、命をば助け給へかしとありしかば、彼旅客うち笑ひ、不思議のことを聞くものかな、其香爐は我身にありて益あるものなり、いざ疾く與へよとこれを奪ひ、熟くと見て懐に藏めて云ふ、我はこれ此桃尾に住む山賊の棟梁、丑太といふものなり。此程筑紫にありしが、さまでよき事もなきまゝ、只今此山に歸る處にて、汝に行遭たれば剥取つて土産にせんとして、此名器を得ることと思ひよらざる利市なり。此喜びに汝が命を助けたけれど、我住家を人にしらしめては後の禍なれば、不便ながらも今世のいとまをとらすなり。こは我



を恨みな、常言鄙夫罪なし壁を懐いて罪ありと、かゝる寶を持ちたるゆゑ、非業の死をばなすぞかしと云ふ聲と諸俱に、腰の刀を抜くかともれば、蕭七が首は前にぞ落ちにけり。丑太は其屍を叢の裡に蹴やり、名器を得しを深く喜び、思ひ出したるやうは、我先年此處に於いて一人の漢子を殺し、長櫃の寶を奪はんとして、美女を得たりき。今年の今日は、此旅人を殺して、此名器を得ること、思へば此地方は我身に幸ある土地なりと、獨喜び急ぎ我家に還らんとせしに、いかにしてか途に迷ひけん、歩めくど我知る道に出ざれば、こは不審と少刻佇みてありけるが、只看れば林の裡に一軒の草屋ありて、火の光幽に閃めき出しかば、此家に立寄り道を問はゞやと、その門邊に至り案内を乞へば、裡より五十ばかりの漢子たち出で、誰ぞやと問へば丑太

回應けるは、是は桃尾に參るものなるが、道を過ちて何處なるを辨へねば、教えさせ給へとあるに、彼男そはさぞ惱み給ひつらん、委しく教へ申さんするに、まづ此裡に入りて憩ひ給へとあれば、丑太喜び裡に入れば、彼男爐邊に誘ひ茶など興へつ、四方山の物語するうち、夜嵐の吹くにつれ隙漏る風の冷かに、ぞつとして身の毛いよだち、何とはなく物凄くおぼゆれば、おもはず主の側近く居寄りてこれを見るに、あな不審前年此處にて、美女を奪ひしとき殺したりき漢子に彷彿しかば、駭然と驚きまどふに、懷より杜鵑の一聲聞えたれば、扱は我身の禍こゝに來れりと、ますくまどふその時、主の男丑太をはたとにらまへて罵りたるは、いかに丑太われは是前の年汝が爲に非業の死を遂げたりし、桃井孫右衛門の家の子貞輔なり。主の女兒を奪はれつ



る恨やむときなく、今夜やうやく閻王のみゆるしを受けて、汝に恨を報はんとなす、いざや我住むかたに來れよ。と引立て行かんとするを丑太は心飽まで猛しければ、早くも腰刀をぬき放ち切拂ひつ、嗚呼愚なり貞輔、我手なみをば知りつらめ、汝等ごときに取殺さるべき、其處立退。と幾回となく切拂へば、今までありし家も焼火も消失せて、廣くたる郊原となり、一團の鬼火目先にありて、其影に貞輔が姿遊絲のごとく立居るに、丑太いらち執着ふかきしれものめと、切れどもく水の月、姿は見ゆれど手ごたへなく、つきまつはりつ恨を云ふに、丑太は今心神も勞れ、氣もたゆみ、とある木の根に蹶きしが、其儘其所に絶え入りぬ。放下一頭却説、這裏には忠兵衛秋しく山の辻堂において、危難に遭ひつるを、順禮の男に助けられ、梅川を俱して大和路

さして落ちけるに、程なく彼順禮追著しかば、忠兵衛これに恩を謝すべく看一看に思ひがけざる忠三郎なりければ、大いに驚きなに故をもてこゝに來たるやと問へば、忠三郎云ふ前日おん身と復讐の物語しつるを、母立聞し、僕にしかく云はべりぬとて、忠兵衛は直兼が子にて、龜屋がかたに行きたりしこと、さて主をして家夫貞輔の讐を討すこと心苦しければ、僕一人の力をもて討つべしと母の命にまかせ、斯くは打扮ぬ。速に筑紫へ赴くべきにはあれど、おん身のうへ心もとなく、こゝに來りしに危きを看まゐらせたれば、如此には及びつれと、詳に語りたるにぞ、忠兵衛はじめ我素性を知り、道芝妙閑が忠だちて養ひつることを感じ、何れも増り劣りはなしといへども、まづ丑太を討つて道芝が恩に報ひ、爾して后自ら人殺の罪を名乗出て、妙閑

が囚はれのゆりんことを計らばやと心を決めしかば、梅川をすかし、孫右衛門がもとに送り届けんすれどさらに肯はず、強ひて爾せんとすれば、自害すべき光景なれば、詮すべなく其心にまかせぬ。此時忠兵衛は、貞輔が我を養ひしを思ひ出せば、梅川も彼は我爲に死せることを云出て、二人懐舊の涙をうかべ、あひともに恩を報ゆなれば、諸兵に丑太を討たんと云ふを、忠三郎そは母の心にあらずと、さまざまに止むれどさらに肯はざれば、やむことなく終に三人打連れて筑紫に下り、丑太が去向を撈しけるに、知るものありて教へけるは、其丑太此程まで此地方にありしかど、昨日故郷に還るとて去りにしとあるに、三人再び道を急いで、其跡を慕ひ上り、只今桃尾山の麓に來りしに、何者ともしれず倒れ居るものあるにぞ、怪みて月影にすかし看れば、

齡六十ばかりと看ゆる旅人にてありけり。梅川これを看ていへらく、是尋ね索むる仇人丑太にこそ。と云ふに二人は限りなく喜び、忠三郎はやりてこれを斬らんとするを、忠兵衛おし止めて云へりけるは、今斯く絶入りてあるは死したる者に均し、まづ叫活して討つべし。とあるに實にも爾りと、丑太が面に水を灌ぎなどしつ叫活すに、やをら人ごちつきて邊を看まはし、忽ち梅川を看とみ、いと怪しげにうちまもり居るを、忠三郎聲を勵まし、いかに丑太たしかに聞け、汝五年前こゝにおはす、梅川主を此處にて奪ひし折から、我父貞輔を討ちて立退きつるを忘れはすまじ、我は其貞輔が男兒に忠三郎といふものなり。汝が兇惡の天罰只今むくひ來て、不圖此に出會ふこと、佛神我に仇を報はさし給ふ冥助なり。いざ心よく勝負せよと詰よするに、丑太あざ